

不退上人木魚念仏出入一件史料

平 祐 史

例 言

一本史料は京都市伏見区下鳥羽法傳寺に所蔵する『開山不退上人本山江被召出候問答之一件記』（『一件記』と略称）の表題をもつ古記録（美濃判紙綴三冊二二六丁）

で、寛延・宝暦年間に法傳寺に住持した光蓮社触普不退円説（大坂北野宗金寺開山、宝暦九年八月三日歿）の提唱した法伝寺流念仏（木魚念仏）勸化の説法が動機となつて惹き起つた異安心の所説をめぐる出入に関する宝暦元年より同三年にかけての一件記録である。

一 不退の異安心出入一件に関する記録が『知恩院日鑑』宝暦元年より同三年の各冊の随所に刻明に書き留められており、これと『一件記』所収諸記録とを対照すると、符合一致する記事が多く、『一件記』の史料とし

ての信憑性はかなり高いものと言える。なお『一件記』の史料の詳細については、拙稿『開山不退上人本山江被召出候問答之一件記』の史料的性格について（『鷹陵史学』第3・4号所収）において、報告しておいたので、これを参照されたい。

一 不退の法傳寺流念仏の勸化に伴う異安心事件の顛末については、拙稿「宝暦年中鳥羽法傳寺宗義出入一件について」（竹田聰洲博士還曆記念『日本宗教の歴史と民俗』所収）において、若干の紹介を試みたので、これを参照されたい。

一 『一件記』を翻印するにあたり、所収各文書・記録の頭初に、番号と見出しの標題を与え、これに基づき目次を附し、読者の便宜をはかった。

一 本史料の帯出閲覧を快諾いただいた法傳寺住職伊藤芳朗師に深謝の意を表するものである。

開山不退上人本山江被召出候

問答之一件記 目次

〈上冊の部〉

- (序) (宝曆三年) 十一月六日より同月八日まで本山決談所ニ出頭、追寺処分を申渡さること
- (一) (同年) 十一月八日 法傳寺惣代・旦那惣代本山へ口上書控
- (二) (同年) 十一月八日 法傳寺末寺惣代・旦那惣代本山役者中宛勧養預り受書(控)
- (三) (同年) 十一月十日 西公事方松村三吾、法伝寺・同末寺召寄状(控)
- (四) (同年) 十一月十一日 西役所における不退の覚書
- (五) (同年) 本山六役中決談所に於ける四十三条の問答覚書
- (六) (宝曆二年カ) 九月六日より同月八日までの決談所に於ける問答記録
- (七) (宝曆二年九月十八日カ) 覚書

〈中冊の部〉

- (八) (宝曆二年カ) 九月十五日 法傳寺・末寺惣代、惣本山役者中へ口上書
- (九) 十月十一日・十九日 本山へ召寄問答の記録
- (一〇) 伏見光月庵水心口上書
- (一) (宝曆二年) 十月二十日 不退本山へ対決願のため登山
- (二) (同年) 十月二十二日 本山宛対決願の「口書」並に出願記録
- (三) (同年) 十月二十六日 鳥羽法傳寺檀中より本山へ願書
- (四) (同年) 十月廿六日 法傳寺檀中本山へ口上書並に本山出頭記録
- (五) (同年) 十月廿九日 法傳寺末寺惣代、本山帳場へ御朱印御番断書
- (六) (同年) 十月晦日 本山帳場より召状
- (七) (同年) 十月晦日 法傳寺より本山帳場宛返書
- (八) (同年) 十月廿九日 法傳寺より本山塔頭信重院宛書翰
- (九) (同年) 十月晦日より十一月廿七日まで本山における吟味取調記録並に返答書

- (㉑) 伏見寺社方仰渡控
(㉒) (宝曆二年) 極月廿四日 本山より呼出、廿五日法伝
寺登山のこと

〈下冊の部〉

- (一) (宝曆三年) 十一月廿四日 法傳寺本山へ御返答口書
の写

- (二) 宝曆二年九月廿七日 伏見黒谷末寺より本山黒谷へ訴
状写

- (三) 伏見福藏院へ示す文

- (四) 宝曆三年十一月六日 本山召状写

- (五) (同年) 十一月八日 法傳寺且那惣代、本山役者へ差
出願書写

- (六) (同年) 十一月八日 法傳寺惣代、代官へ差出口上書

- (七) (同年) 十一月十日 西公事方より法傳寺同末寺召出
状並に法傳寺末寺、且那より本所宛出頭の届出

- (八) (同年) 十一月十一日 法傳寺且那惣代、本山役者へ
西役所出頭の届出

- (九) (同年) 十一月十七日 西公事方松村三吾より法傳寺
末寺召状

(表紙)

開山不退上人本山江

被召出問答之一件記

元 譽 貞 □

序

佛光山宗金輪寺往昔行基大士浪花長良橋新建之時休息之地、而自造願王尊像及十一面大悲之尊容為本尊而胆仰、聖武天皇之勅願所也、時至寶曆度大破、而不退師住城劔鳥羽法皇山宝伝寺、浄土一門創用木魚策勵誦經念仏而世人不知_レ知_レ是原_ニ聖契_一、還詰為異風惑世、而以奏惣本山、而退師不_レ屈、敏達公訟而転進不_レ屈、還請讒者対決而公役

無慙攻公役理解不_レ諾追放城劔、而退師感_ニ歎濁世_一、終至_ニ此廢跡_一、大愁常行頭陀常說_三三ヶ年、当所帰從京音羽御所、寄黄金五十兩輔再建之基_一、(法九) 浄宗祖自作自容附_ニ祖国師而展転至退師以永属_ニ当寺供養_一故鎮西一門可尊信之古跡也

永命同御所二世回願所、贈_ニ紫服紫紋幕等_一、其昌復_レ古世浪花比_レ是者、終退師感_ニ瑞干此_一、逐無始本懷之勝跡也、往流布

然不幸至天保度類燒荒蕪子不_レ忍_レ見_レ是準退師行跡常行万衛三年常說法百萬果号満_ニ万坐聞_ニ四方戰死_一、万部小經不殘供養塔、至大政一新布_ニ告改_一寺跡幸甚々々、当今都鄙僧無本末之簡、俗無_ニ貴賤之差_一、無信_ニ用比器策勵信材全不在退師之昔惱其功満四海上下己向_ニ二百年於戲正法天運人力所以不及制之感阻湿袖今逢此天命雀躍、奏_ニ此古跡_一復開基勸願所并音羽御所由緒且木魚木山之稱一奏達、爾來為報退師中興之功表木魚本山之稱無人不感焉
明治四年九月 浪花北野宗金寺

城劔西岡菱川村

說譽隆音 花押

西向寺復住之時也

此外有數品

(一) (宝曆三年) 十一月六日より同月八日まで
本山決談所に出頭、追寺処分を申渡さるこ
と

十一月六日 法傳寺触菅末寺惠光院・本光寺・一念寺・
西蓮寺外ニ末寺三ヶ寺、且那惣代三人右明七日四ツ時
登山可有之旨、御召成ニ付則登山、御役所ニ而六役中・
山役中・帳場中列席被仰渡候趣右之通

触菅儀近年諸所ニ而説法仕、勸メ方宗儀宗風ニ相背キ
諸向江差障、依之去々年大坂黒谷百万遍門中ノ御公邊
江相願可被申旨、大坂末寺ノ相訟出候付召出し吟味之
上触菅并末寺ニ急度申渡候処、其儀を不相守説法仕ニ
付騒動ニ及ひ、伏見末寺ノ訟出其上国法御条目ニ相背
キ不屈之到ニ候、依之追寺申付候、然上者説法ハ勿論
講釈ケ間敷儀迄も令停止候、取意

一末寺共触菅江異見をも可加之処、無其儀都而御鑿義を
相拒ミ不屈之到急度可被仰付之処、御憐愍を以惠光
院・本光寺・一念寺・西蓮寺閉門被仰付候、取意

右申渡書御渡被成候処、触菅末寺四ヶ寺とも承知不
仕候ニ付、書付即座ニ御取戻し

一末寺三ヶ寺且那惣代三人江申渡候

御朱印并諸什物相預ケ候間、触菅より請取可申旨被仰

付候処、且那惣代小笹与三五郎・同次郎左衛門・同又
三郎御断被申上候者、星迄住持入替之節五日三日之間
者末寺且那立合御守御番可相勤旨被仰付候儀者前々ノ
御番勤来候得共、此度御朱印御預ケ被成候儀者御地頭
江相伺ひ不申候ハ而者、得御返答不仕候、取意

六役者江仰渡候ハ、然者集会堂ニ差控可申と又夜五半
時不殘御呼出し被仰渡候ハ、触菅者一旦追寺申附候迄
者、仮合不承知ニ而も法伝寺ヘ差戻し候者難成候間、
今晚者本山江止宿申付候、末且那共勝手ニ下山先刻申
渡候御返答明日中ニ可致、且那末寺申上候ハ、触菅御
止宿御尤ニ奉存候ヘ共、今晚ハ且末として預り帰り申
度と六役中被仰候ハ、何様預り度と何とそ一生御願可
申上云云、偕又被仰候ハ御窺申候処僧正被仰候ハ触菅
今日申付候儀、御受申候ハ格別左なくとて此方ニ留置
可申御公儀江も申上置候得者、此御左右を以可相計候
と末且然ら者迎下山触菅・本光寺・天然寺随従ニ而止
宿

一十一月八日末且ノ御殿江御窺御届申上候処、兼而御殿
ノ当僧正御入院砌、伏見法傳寺出入之事無難ニ相濟候
様、御使者被遣置候処ニ、此度未吟味中ニ而双方対談
も不為致片手打之致し方、御殿之分相定不申候とて、
即日御使者湯口主水御出被成候趣

一 僧正御方江菊亭殿被仰候、法傳寺儀追寺被仰付候ハ伏見表御末寺と対談有之上ニ候哉、対談無之上ニ候哉、此儀可被仰聞候

一 末寺四ヶ寺江閉門之事、右四ヶ寺ナリ、此方百姓ニ而相応之田地ニ而相統致候御支配寺ニ候処、此方江も無御届閉門被仰付候先格ニ而候哉否之儀可承候

一 住持追寺末寺閉門被仰付候趣ニ而、且那末寺不得心ニ候処、押而御朱印本山ヲ御預ケ被成候、先格にも御座なく候付、此度押而末且江御預リ可申上旨被仰候哉、右三件之趣口上ニ而者間違も可有御座候間、一々書付ニ被成御返答可被仰こと、取意承候分記之

一 同八日末且ヲ御本山江御願申上候願書ハ別紙ニ阿リ、触譽追寺被仰付候上者、法傳寺ハ相立不申候段、御願ニ大沢九郎右衛門・大沢庄兵衛殿罷出候処、御役所

ハ被仰出候ハ成程親切之願尤ニ思召候、併昨日被仰渡候趣触譽手前不仕候ニ付、今日迄も追寺之思召ニ候ハ此願者難取拳候、幸ニ末寺も法泉寺・天然寺兩寺隨

從候へ者、今晚且那惣代兩人・末寺惣代兩人ニ而触譽ハ預リ度願被致候ハハ、御戻し可被成候間、其願を先可致と依之且末四人相談之上預リ願差出候得者、即刻御免触譽同道ニ而帰り申候、本山を出候所九ツ過也

(二) (宝曆三年) 十一月八日 法傳寺惣代・且那惣代、本山へ口上書控

奉願口上書

一 法傳寺触譽儀、追寺被仰付候処、不承知ニ付昨晚御本山ニ御止宿被為仰付候処、今日御願申上末寺且那預リ申度奉願候、何時ニ而も御召次第御登山為致可申候間御許容奉願候已上

十一月八日

末寺惣代

法泉寺
天然寺

且那惣代

大沢九郎右衛門
大沢庄兵衛

(三) (宝曆三年) 十一月八日 法傳寺末寺惣

代・且那惣代本山役者中宛触譽預り受書

(控)

御受書

一 觸譽儀末寺且方願之通、御預ケ被成下樋ニ預り申候、然上者何方江も他行致させ申間敷候、何時ニ而も御用之節、御公儀者勿論御本山へ同道仕罷出可申候已上

酉十一月八日

末寺惣代

法泉寺

天然寺

旦那惣代

大沢九郎右衛門

大沢庄兵衛

御本山

御役者中様

(四) (宝曆三年) 十一月十日 西公事方松村三

吾より法傳寺・同末寺召寄状 (控)

下鳥羽

法傳寺

右末寺共

右末寺之者共同道いたし明十一日四ツ時可罷出事

十一月十日

西公事方

右之通被仰出候間、銘々印判御持參被成明十一日四時

無間違様御出可被成候已上

但西役所へ御出可被成候事
酉十一月十日

松村三吾

(五) (宝曆三年) 十一月十一日 西役所における不退の覚書

一同十一日法傳寺并地末寺七ヶ寺明六ツ時ニ上京仕、松村三吾江只今役所へ罷出候由、本光寺相届申候、四ツ時ニ役所へ参上仕、八時迄廊下ニ相待候処、公事役木村与三兵衛殿被罷出法傳寺并末寺へ被申候ハ、此間本山追寺閉門被申渡候処、不承知之由不宜相受被申候ハハ宜と被申候、其節和尚末寺ともに此儀者伏見門中ハ本山表江ヶ条を以被訟出候処、対談も無之、此方江ヶ条之難被仰附候間相受不申由返答仕候得ハ、与惣兵衛殿追付御預御聞可被成候間、其節可申上由被申候、八ツ半過ニ御前江罷出候得者、能登守殿被仰候者本山ハ被仰付候由如何不受哉と被仰候ニ付、和尚被申候ハ伏見門中ハヶ条を以被訟出候処、対決を願候得共左様之儀も不被仰付候而此方、計追寺被付候間不承知之段申上候、本山之末寺ニ居申候得者たとひ越度無之候而茂違背不仕候得共訟之方者無吟味、ヶ条茂一々御返答

申上置候、何卒伏見門中と対談被仰付候ハ、難有奉存候と申上候ヘハ、能登守殿被仰候ハ、其伏見出入者各別此度本山ハ被仰付を違背被申候者不宜、其上本山ニ不用木魚鼠衣を相用候段、越度ニあらすやと被仰候、仰御尤ニ奉存候、鼠衣者沙弥衣ニ而御座候間着用為致候、此儀も先達而御返答申上置候、木魚之儀も是のミ相用申ニ者阿らず、勤行鐘を用ひ、間之節相用申事ニ御座候と申上候得者、其分ニ而御尋も無御座候、さてまた能登守様被仰候者、其方ニ者祈禱百万遍者役ニ不立由申との御尋、御返答ニ左様ニハ不申候、此儀者浄土宗者生死か大切ニ候得者往生之障リニ相成申由申聞せ候、たとへハ津なける船ニ棹さすことしと御返答被申上候ヘハ、能登守様法儀者此方ニ者不存左様之儀者本山にて吟味可有候、免角本山ニ而不用物を被用候故、右之越度被申付候由被仰候、和尚御返答ニ免角伏見寺方ハ種々之ヶ条を訟被申故、何卒両方対決被仰付被下候ハ、難有奉存候由、達而被申上候得共、能登守様先今日者立可申又重而者越前殿と立合吟味可仕由被仰候、伏見も御上様ニ被仰候様ニ相聞候、此時ハ六役立合永養寺・智恵光院兩人扱末寺、其次ニ御前江罷出候處、何角様子御聞なされ候、恵光院伏見出入之事被申上候、西蓮寺閉門之事被申上候、本光寺木魚ニ付乍

憚申上候、宗旨者道具ニ而者相立申さぬこと奉存候由申上候得者、能登守様被仰候ハ左様ならは何ニ而相立候由を御尋被仰候時、経文書籍ニテ相立申由申上候ヘハ左様ニ相心得候故、本山ニ用ひぬ木魚・鼠衣杯相用ひ候由被仰候、扱先今日者相立申様ニ被仰法傳寺儀末寺へ御預ケ被成候由、被仰候而廊下江罷出候得者公事役木村与三兵衛殿先夫ニ相待可申と被申候故、相扣罷在候処暫有テ罷出被申候ハ、又木魚・鼠衣之事再三被申候故、恵光院此儀も外之寺方ニも浄土宗ニ用ひ申由被申候ヘハ、与三兵衛殿其寺者何れニ而候哉と被尋候処、本光寺小松谷寺町安養寺等ニ相用ひ被申候と被申候ヘハ、夫ハ慥ニ召届候哉、成程前度見申候と被申候由を申候時、与三兵衛殿被申候者、是ニ六役中も参居被申候間、其寺之詮議為致候、安養寺ハ吳山流ニ而無本寺也、此寺も只今無住ニて願之筋有之此方之掛り之由被申候、扱又和尚江与三兵衛殿被申候ハ、其方之談義いかやう成事を被申候哉相知レ不申、京都説法者御見附衆様子被相聞候得共、其方者二三里も隔候得者御手廻り不申候故、何事を可被申候哉知レ不申候、惣而談儀説坊主ニ直なものハ無之由勸事を致し錢取を専と致し申由、夫故世間ニ而も談儀坊々々と申と被申候

時、和尚も腹立被致左様被仰候者、此方之事ニ而哉と餘程顔色違ひ被申候へハ少之内ハ与三兵衛殿も困り被申候様ニ相見へ、其後此方者天下之役人殿之名代相勤候此方江致気色何と被致候哉と被申候時、和尚余り心外ニ存ケ様ニ申也と被申候

扱又其後ニ与三兵衛殿被申候ハ法傳寺も末寺も此事ハ何国迄も云強るかと被申候故、和尚末寺口を揃へ何程何国迄も申強る旨申候、夫より与三兵衛殿奥江被參暫有之罷出末寺へ帰り可申由法傳寺者同用之其方者預ケ不被申、組寺者近所ニ有之哉無哉と尋被申候間、組寺ハ無御座候、法傳寺者一本立之由申候、末寺下り後ニ而六役衆江御預ケ被成候

六 (宝曆三年) 本山六役中決談所における四十三条の問答覚書

左ケ条之儀者六役中決談所ニ而彼方ニケ条を扣一々読立一ツ々々直ニ決談所ニ而返答書被為致候故、写取候事を不被許、思熟仕返答書可仕旨申候者、暫も思案致候ニ者不及、直ニ返答可致と被申渡候故、次第も不覚候得共、心ニ覚候荒増を書記し申候事

一御尋其元説法ニ念仏を被勤候ニ付、老若男女夥敷帰依

致すとある其説法者如何心得演説被致候哉

即答御當山之正流専修念佛を弘通仕候、則選擇集・御傳語・灯録等ニ而勸化仕候

一御尋施餓鬼法事を勤候事ハ一向無益と被相勤候由や左様にて然

即答ケ様之御尋ハ何れぞそ御訟ニ而候哉、一向證訟と奉存候と、仰ニ云先ツ其許か其様ニ爰ニ而罵り被申候ニハ不及此方がいぬと入レ聞合せ又ハ風聞を承届候而相尋ぬるなれ者知る事ハ知る、知らざる事ハ知ぬと返答書をせらるべしと御答書ニケ様之儀者一向相勤メ不申候、其証扱ニ者手前ニ而も毎年七月十五日施餓鬼相勤、其外末寺且中之年忌佛事等ニも施餓鬼相勤申候

一佛檀ニ有之餘佛菩薩之像并位牌等をも悉く取除き可申と相勤メ被申候由や其通りニ候然
即答此儀一向勤メ不申候 此下ニ而彼方る種々之なじり事アリ

一念仏ニ者現世之利益者無之由被勤候か

即答出離生死を相勤メ候ニ者、現世利益之儀者一向不勤、随自意本意之一大事之往生相勤メ申候、但初心之行者ニ者先ツ念仏申せハ親近増之三縁五種之増上縁之功德利益護念等之備り候事を申、扱往生極楽の為にと念佛申す者ニハ我志らす此功德か備ハリ、

現世安穩の爲にと申す念佛にハ、如此之功德も利益もなしと勸めて往生を決定せしめ、偕又譬喩經其外之經論ニ念佛にて惡病を除き命を延し杯見へ候ハ、皆は一機之所感にして、十八本願之不簡択之念仏トハ其儀格別也と申聞せ候

一百万遍念仏一向無益之由被勸候と

即答此儀一向無益トハ相勸不申候

一祈禱百万遍ハ無益と被申候カ

即答祈禱百万遍ハ往生之障リニ成候故、無益と誡め候、并ニ井戸繩たぐり候様ニはかゆきにくり候ハよろしからすと申候

一如来并ニ位牌に靈膳を備候事無益と被勸候と

即答仏事追福等ニ位牌ニ者、靈膳備へ候て、如来にハ靈膳不備ハ不宜と申候

一亡者の死骸を佛前ニ差置候ハ甚不屈也、死骸を庭乃隅にへしこミ置可申と被相勸候と

即答左様之儀者如何勸可申、但し死骸を如来之正面ニ直し置候ハ、息氣不淨ニテ如来へ之恐れあれハ葬礼之節如来前之傍に屏風ニ而も隔てす可申と由聞せ候

一其寺にハ朝夕之勤行ニ鐘を取拂ひ木魚計ニ而勤行被致候と

即答初ニ誦經次ニ伏鐘ニ而六字誥念佛、勤行之終ニ木魚ニ而線香一炷つゝ所作念佛相勤申候

一七月精靈祭一向無益と被勸候然

即答左様之儀一向不勸、但し鹿末成物を供養し候を誡め候、則拙僧も棚経ニも廻り申候

一大坂宗金寺ハ法傳寺勸化所ニ取立候而、散物施入等此入用ニ被致候と申候ハいかニ

即答宗金寺ハ法傳寺抱寺ニ而者無之、則三番村ノ移し候寺ニ而起立者河内屋伊兵衛・河内屋加左衛門と申兩人ニ而候、看坊住持者天満屋敷山本長右衛門縁者則拙僧弟子ニ而候

一伏見光月庵と申ハいかか

即答光月庵ハ本伏見大亀谷ニ有之候を、拙僧譲り受只今之持家江御願申上引移申候、起立者鳥羽屋平六一老若男女夥敷弟子ニ成尼同心者弟子殊之外多候由いかか

即答左様ニハ無之尼三人・道心者五人・小僧弟子九人御座候

一法傳寺境内ニ庵を建、多く尼を入置候よしいかか

即答法傳寺ニハ尼庵ハ無御座、門前屋敷地ニ旦那大沢六兵衛隱居所御座候而縁者之尼被居候、手前之說法御座候節者諸方ノ參候尼五人も十人も居申事も御

座候、常ニハ兩人被居申候

一其元説法いかやうニ勸候と尋候へハ選択集・御傳・語燈録・一枚起請之趣ニ而專修念仏を弘通と被答候か、尼入道男女江者いかやうに演説被致候哉

即答此所ニ而浄土立宗之奥義機法二種之善導之積ニ依而説法一座仕候、此下ニ而正雜二行之問答ニ及ビ終ニハ此方利分ニ相成候

一尼道心者小僧其名前其旦那寺其年其親元皆一々書付可申と

此下ニ而直弟子日課弟子三衣着用之弟子名前・年・

旦那寺・親元不殘書付差出候

一西岡古市村助左衛門娘廿一歳ニ罷成候者致出家法傳寺弟子ニ成、親共殊外歎居申由いか

即答助左衛門娘ハ法傳寺ハ弟子ニ不仕、家か内ニ而髪を切大阪天満ニ罷在候照月と申尼之所へ駈込候由、照月ハ親共方江相對致し候由ニ御座候、照月者

手前弟子ニ候

一去年十月法傳寺末寺横大路浄貞院にて竹田觀音寺説法致され候、回向に施餓鬼法事相勤候ニ付本寺法傳寺を相頼申候へハ、法傳寺被申候へ、施餓鬼ハ手前か勤る所作ニ非ず、其替リニ其後にて清め之説法致し遣し可申と被申候由

即答其儀者以之外之事ニ候、本寺之儀ニ候へハ、浄貞院ハ法事之導師相願候故、拙僧申候ハ是迄觀音寺和尚説法御勤今晚も御説法有之候へハ、觀音寺和尚へ對し而も無礼ニ候故、矢張觀音寺を法事之導師ニ相頼可被申と申のミニ而候事

一立像之弥陀を取除き座像ニ致し可申候こと、在家ニ相勸被申、伏見法傳寺講ハ不殘座像弥陀一軀之仏檀ニ致し、并ニ伏見法傳講ニ加ハリ候者ハ皆糸鬢ニ剃り下ケ伏見ニ而者糸鬢ハ皆法伝寺講と申候と

即答此儀一向不勸一向不存候

一凡僧之回向者何之用とも不立、旦那持來候齋米ニ回向するにハ不及と被申候故、其故いかんと尋申せハ、喩ハ齋米者地頭江百姓ハ年貢を納め候如く旦那役なれハ回向ニ者不及と被申候由はいかんと

即答只今地頭と百姓との喩を被仰候ニ付思ひ出し候、成程三年前已前伏見念故寺和尚御招被成候故、罷越御互ひニ此度往生之大事を御相談申上候時申候得共、手前か申候とハ天地之相違ニ御座候と申せハ、役者中何れも其念故寺也、不包委く可被語と有之候故、念故寺之念仏安心之間違真誑念仏、ざら／＼念仏などの阿やまち回向之依怙等々を委く語り、其上ニ而四種之回向之儀を申、薰発回向又自行即化他之

喩ニ辻番之火と燧箱之火とのたとへ等ニ而念故寺江
咄候通、役者中之前ニ而又一座説法仕候へハ六役山
役迄耳を傾き感心之躰ニ相見候、其日ハ殊ニ一汁三
菜之料理を頂戴仕候

一其許寺住職も七年ニ成候か建立者何を被致候哉

即答御存之通法伝寺者大借銀之寺故古借を相濟申
候、其上普請芥初ハ致候と申候へハ役者中不興ニ相
見て候故、返答書ニハ建立ニハ未取掛リ不申候と致
し候

一其元之佛前ニも大阪宗金寺之佛前ニも伏見光月庵ニも
鐘を取置木魚計有之との事

即答何れも皆鑿と伏鉦と木魚とにて御座候

一伏見阿波橋西詰饅頭屋善四郎妻往生之節、宿坊法傳寺
末寺天然寺と旦那善四郎と口論、其控ハ天然寺被申候
ハ手前本寺法傳寺被申付ニ候へハ、死骸を庭之片隅ニ
差置可申と被申候故、施主も腹立仕以外之口論故葬礼
之刻限一時計延引、葬之供之町衆も退屈致し漸々縁者
何某挨拶ニ而庭之隅より少し出し葬式相勤候とはいか
ん

即答法伝寺者阿まり之事故一向返答も不申候処、則
其日召連候末寺兩寺なから、右善四郎葬礼ニ罷出候
寺方ニ而、一向無之やくたい事と被申候へハ役者中

も仰天之躰ニ相見へ申候

一末寺芹川村海徳寺本尊地藏菩薩を取除ケ弥陀ニ致し可
申旨被申渡候故、海徳寺被申候ハ手前寺者築山主水起
立ニ而候へハ先主水へ可聞と申築山氏へ右断被申候へ
ハ、主水夫ハ以外之儀然ハ法傳寺御知行ハ本々薬師ニ
対する知行、其上法傳寺も薬師を取除きて此方江も可
被申道理なれとて、築山氏ハ法傳寺へ手紙を遣し被申
候処ニいかゞ致され候哉、爾今法傳寺ハ返答無之候と
是ハいかか、末寺之本尊さへケ様被申候からハ在家仏
檀之餘佛并を取除といへるハ偽ニ而者有間敷かと存
すると

即答此事ハ跡方もなき空事ニ而候と申内ニ召連候末
寺本光寺・一念寺兩寺阿まりニ法外之御尋事共ニ
候、海徳寺ハ法傳寺末寺之儀、主水ハ且縁之儀ニ候
へハ、急度呼ニ可遣直ニ御聞可被成と申候へハ、否
強而相尋候ニ者不及、知らずハ志らぬと返答書せら
れて濟事と被申候故、何れも一向不存事と返答書仕
候

一湯屋清右衛門娘、萬屋五兵衛方へ嫁入致し候、其媒者
鳥羽屋平六五ニ専修念仏者之事なれハ送り物者、五ニ
線香・五種香・念珠・料理者本より精進仕立、偕千秋
楽の代りニ合十念致候よし、是ハ法傳寺流之教方と専

風聞ニ候、是ハいかん

法傳寺即答誠ニ阿やしき儀ニ奉存候、清右衛門伴ハ拙僧弟子ニ而候故、五兵衛方へ娘参り居候儀者承居申候

一西岸寺旦那何某と伏見法傳寺講何某と石地藏土地蔵之せりふに及び、法傳寺講まけ候へて帰り候道ニ而、四丁町之辻々ニ老若男女立集法傳寺講かまけたりとて、其罵りかまひすしき事鯨波のことしと候ハいかん

即答一向不承一向不存候

一伏見光月庵ニ而念佛会相勤候、訟ニ而鳥羽屋平六座敷談義を説き講外之男女を相勤候由是ハいかん

即答ケ様之儀一向不承候、是太切之儀ニ御座候得者、吟味仕追而可申上候迄返答書仕、扱平六吟味仕候へハ一向無之事と申ニ付又其通返答仕候

一葬禮ニ引導焼香無益戒名無益夫々者、六兵衛・七兵衛と俗名を称へ候可能候、年忌作善卒都婆を立、水向等をも一向無益と被勤候事いかん

即答一向不勤候

一木挽町市郎兵衛旦那寺光照寺江参り物語致候は、私を法傳講ニ入候様ニ段々相勤申候へ共、法傳寺講ニ入候得者、役行者参も其外之神社へも参る事成不申候よし、夫故念仏ハ申度候へとも得入講不仕と申候故、和尚被

申候ハ浄土宗者左様ニ窮窟成事ハ無之候、何方へ成とも参り可被申、又念仏申たくハ如来前ニ而約束志なりとも、亦手前か授遣なりとも可致、左様ニかたよるはあしき事と被申候由、是ハイかん

即答一向不承、一向不存候

一光月庵ノ道心者四五人つゝ毎日々々法傳流之念仏申托鉢ニ出候由いかん

即答光月庵ニ者道心者罷居候故托鉢ニ出可申、法傳寺ノ尼を出し不申、但し門前大沢六郎兵衛隠居へ説法仕候節者、諸方ノ尼集り居申候節是等可出申もやと奉存候

一伏見三十三所并ニ四十八願所者余行と被勤候故、次第ニ参詣も薄くなり、只今ニ而者一向散物も無之様ニ相成候と

即答三十三所西国巡礼者、余行ニ而往生之障りニ成候へハ毎度いましめ申候、四十八願とやらんハ伏見ニ有やなしやも不存勿論一向不申事ニ候

一伏見光月庵当五月ノ普請ニ取掛り間数も取ひろげ候て、法傳寺勸化所と触廻し、表ニ掛行燈を出し講中ノ諸人を相勤候様と申候ハいかん

即答当五月伏見御奉行様御上り被遊御見分道筋ニ候

へハ、表向庵らしく取繕ひ候様御役人中より被仰渡候故、先達而願出し候通普請仕候、法傳寺勸化所とハ不存寄事ニ候、勿論諸勸化一銭も不仕候

一鳥羽屋平六町内是迄地藏祭仕候ニ、当年者地藏祭相止め、其上最初持参候人へ地藏をつれもどし候故、是を見習ひ其辺之町々多く地藏祭を相止め候といかん

即答左様之儀一向不存不承候

一三栖半町竹屋七兵衛旦那寺西光寺江参り物語ニ、此方之近邊ハ皆鉦を止め不残木魚ニ而念佛申、其近邊に而鉦を叩き候者ハ私人故、鉦も叩きにくき程ニ候と被申候よしいかん

即答手前説法ニ帰伏仕、左程念仏ニかたまりとて難有事ニ奉存候得共、念仏往生をこそ勧め候得共、木魚を勧め申候儀ハ無之候

一天王寺や久兵衛旦那寺光照寺へ参り被申候へ、法傳寺講ニ入候様ニ段々相勧め候得共、法傳寺之勧め者何とやらん替りたるやうに承候へハ、先ツ説法聴聞之上ニ而入講可致と申、其後説法十座計承候処至極御尤難有儀ニ奉存候故講ニ入申候、法傳寺勧め承候へハ伏見ニも御幸宮・藤の森杯清浄之宮居有之候上者、伊勢御祓諸方之札をめくり捨可申との御勸故只今ハ一切札を捨、当年伊勢太夫被参候得共古き御祓を用ひ、

新き御祓者請不申候、御初穂ハ是迄之通進申候と物語とはいかん

即答其久兵衛と申仁成程存居候得共、此人ニ限り左様之勧め者一向不仕事ニ候

一伏見下材木町ニ始者法傳寺講八九人有之候、其名前ハ淡路屋六兵衛・天王寺や久兵衛・升や甚兵衛・藤屋勘兵衛・升屋与兵衛・鳥羽屋平六・万屋五兵衛等、是等者称念寺・念故寺・光照寺旦那之部類ニ候、升屋甚兵衛出家仕候後ハ段々相勧め候而、只今ハ百餘人ニ及び仏壇も一樣ニ仕るとの沙汰はいかん

即答彼等方ニ者左様ニ法傳寺講有之候やハ不存、此方ニハ覺無御座候

一説法之節小僧兩人鼠色之袈裟を掛させ左右に被差置候よし左様ニ候様

即答兩人ニ不限弟子共不残説法之節も罷遣候、鼠色之縵衣を着用致し候、朝暮勤行法事ニも掛申候

一舩屋甚兵衛是迄有来候仏壇、立像を座像ニ取替称念寺ニ開眼相願候節、称念寺見届候守り本尊并位牌等も取退ケ本尊計ニ而候よし、去七月八日甚兵衛妻剃髮称念寺被参法傳寺此度大阪寺方と出入六ヶ条之誤有之、兎角かたよるか悪候、事理不二といふ事も阿れ者など被申候而物語有之由、其元ニハ被聞候か

此段ニ而者一向返答不申左様之噂ハ不承候と計申居候、此尋者定而大坂伏見之寺々法傳寺之説法者専修念佛を強く勸候故、御条目之事項縦横之源義ニ背くと兼而被申候由拙僧承居申候、有時与風或僧ニ物語仕ハ、諸方之和尚方法傳寺説法者御条目事項縦横ニ背と被仰候よし、殊ニをろかしく存候、時ニ望背くか、背かぬか事項従横と申事御存か、御存なきか、書籍之上を以互ニ一人つゝ承り不申候ハ而者、難許事ニ候と与風物語候故、是を噂ニ取なし流すつもりと奉存候故、態と不承と返答仕候、則拙僧方に事項縦横略章一卷認扣所持仕罷遣候得共態と扣居申候

一 升屋甚兵衛事宗旨印形前故、仏壇も見届其上教化も可致存称念寺被参候へとも、何分和尚之心底ニ不叶之由其分ニ而帰り被申候由、七月十四日棚経之節仏壇見届候へハ、精霊祭も不致弥餘佛并守り本尊位牌迄取除申候由、此事免角其方之勸と被存惣而講中ニハ皆左様ニ被勸候様

即答此儀一向不勸不存候

一 升屋甚兵衛七月十二日其方江参り、同十七日剃髮致候ニ付、悴甚兵衛妻も驚申す由其元々称念寺之使僧ニ而も相对被致候か

即答甚兵衛七月十二日拙寺へ参り出家仕度旨相願候

不退上人木魚念仏出入一件史料

故、拙僧得心不仕銘々旦那寺有之者ニ候へハ、其寺と相对不仕候而者中々弟子ニ者難致旨申候得者、翌日又甚兵衛参何分御弟子ニ可被成下、旦那寺之儀者升屋甚兵衛方当盆際ニ手前矢張居申候而ハ、身上難相立候故、妻子共ニ相对仕離縁仕罷出、則淀表兄助給方ニかゝ里居申候而、何之差構ひも無御座候と申候故、則伏見甚兵衛を相招離縁之儀相尋候処、成程先甚兵衛被申候通、身上不如意より起り離縁仕候旨相違無御座、此方ニハ少もかかり合無之旨、委く承り其上淀助給同道仕段々相願候ニ付、委細聞届髪を剃弟子ニ仕、名を順生と申候

一 甚兵衛致出家候ニ付升屋を離縁仕候得者、称念寺江者相对なくとも、然ハ淀助給方之寺へ相对不被致候ハ而者一日ニ而茂旦那寺無之候而ハ、国法御大法か相立不申候故、何分称念寺か助給之寺か届無之候ハ無念と被存候、扱又是を無念といはれたとて何分難儀ニ成事ニ而ハ無之候ニ、偕て、わるい了簡と被申候故、淀表助給方之寺を相对不仕候段、無念と被仰候儀ハ此方も力ニ不及候間、如何様とも思召次第ニ可被仰付と申候得者、其方からハ無念といはれぬものを、此方よりハ無理ニとハ不申と有之候処、然者今日直答ニハ難致候間追而書付を以御返答可仕と申夫より病氣ニ付休居申候

一 升屋甚兵衛儀拙僧剃髮弟子ニ仕候ニ付、且那寺称念寺ニ一往相届不申候段、可為無念との御不審を蒙り其申披き仕候ニ者、先甚兵衛出家仕度旨相願候得共、此方ニ得心不仕銘々ニ旦那寺有之候へ、其寺を指置此方ニ而出家させ候儀ハ寺法ニ相背候故、是迄之旦那寺と相對不仕候而者、何分弟子ニ難致と申聞候処、先甚兵衛申候ハ其儀者少茂差構無之候、其故ハ某儀升屋甚兵衛方へ後見ニ参居候処、身上段々不如意ニ罷成、当盆を際ニ是迄之通ニ升屋ニ罷在候而ハ、一向後も難立筋御座候付、妻子共と相對之上ニテ離縁仕、町内江も其通り相届ケ升屋甚兵衛方を罷出、只今淀表兄助給方ニかかり罷在候故、未タ頼ミ寺も無御座候へハ、何卒御弟子ニ罷成其上暫御寺ニ御遣ひ可被下段、達而相願候ニ付無心元奉存、則伏見升屋甚兵衛を相招き先甚兵衛被申候通、弥離縁仕候ニ違ひ無之候哉と相尋申候処、成程内證不如意より起り当際ニ矢張居被申候而者、身上難立筋御座候故離縁仕町内江茂其趣相届候而、此方ニハ少茂指構無御座候由、先甚兵衛之申候と一致仕其上淀表兄助給と同道仕、達而出家仕度旨相頼殊ニ助給申候者、伏見表升屋方少々様子御座候故離縁私方へ参り候得共、私儀も出家之身分ニ而御座候得者、別宅ニ而茂為致候様成世話筋も難儀ニ奉存候、本々弟甚兵衛

儀も出家仕度望ニ付、從來伏見ニ罷在候節々日課念仏之御弟子ニ御座候へハ、何卒御弟子ニ被成御召遣ひ可被下候左様も不被成下候得者、当分身之置所ニも難儀仕迷惑に存候、勿論此者ニ付他所々少し何之掛り合も無御座、若此者ニ付後々他所々如何様之儀を申候共、其儀ハ私受人相立私直ニ罷出何方迄も急度申被可仕候間、何分憐愍之上御弟子ニ被成御召遣可被下候と段々相頼候ニ付、委々聞届証文も相取剃髮為致弟子ニ仕、名順生と申候、猶委細之儀者、兄助給并順生御召被遊御聞奉願候

一 称念寺旦那材木町升屋与兵衛・升屋甚兵衛兩人宗旨印形不致候処、与兵衛ハ成程法傳寺講故精靈祭も不仕木魚ニテ念仏申候得共、甚兵衛之様ニ餘佛位牌も取除不申、此上いかやうとも仰を相守可申候間、印形被成可被下と相願候故、翌日印形致し遣し候、甚兵衛儀者親共と相談仕返答可仕と申、此方之申付承引不仕候故、印形不致候と有之既ニ升屋与兵衛称念寺へ直ニ精靈祭不致と申上者、其元々精靈祭無益と被申候へ定而相違者有間敷存するなりと

即答此儀一向不存一向不勸候

(戊) (宝曆二年カ) 九月六日より同月八日まで
の決談所における問答記録

九月六日より

尊命随意ニ任せ廃立をつよく助説被致、専修念仏相動候事、依之他難を可蒙と相聞候

即答尊難のことく尔なりといへとも愚説法へ、廃立助正傍正別規通規随意ニ約し相勸候得共、諸衆異義ニ聞なし、ケ様ニ騒動ニ及び候事迷惑至極奉存候

御尋説法勸化致方随意ニ片寄廃立を募り、五種正行之外、雜行を打払雜修を打拂相勸候故、諸向江差障騒動ニ及候段不調法之勸化ニ候事

即答私勸化説法者、先達而書上候通り祖師選擇集・語燈録・三部之仮名抄等ニ任せ、出離生死大切ニ奉存候ニ付、只往生之法のミ随意本ニ意任せ相勸候故、ケ様ニ他難多蒙候事迷惑至極ニ奉存候

七日

尊難重々奉存候上、国法御条目ニ相障り候而諸方々他難を可蒙候へ曾而不存、只出離生死を大切ニ奉存候故、祖師之述抄ニ任せ只往生之直路之正流を相勸候様、種々ニ申立私一人之過失ニ相成国法御条目ニ相背キ無調法と之尊命奉恐候得共、私從來之説法者助正傍正通別得失を相

不退上人木魚念仏出入一件史料

弁候迄ニ而専修念仏を相勸候へハ、依之国法御条目ニも相背候儀者不及是非奉存候、念佛五種正行之外雜行雜修を打拂尤团扇ニ而打拂ニ而者不存候得共、言の趣強く被申候故西国巡礼・地藏祭・神社仏閣・称宜・神主・巫・山伏・竈祓迄相障候故、騒動ニ及び候との役寺之弁

八日 休日

六役中々被渡候下書写し

一拙僧從來説法勸化之趣国法御条目をも不憚相勸候故、諸向之差障騒動ニ及候段無調法之至可申訳様も無御座奉誤候

帳場之下書之写し

一国法御条目ニ相障候而諸方々他難を可蒙とハ曾而不存祖師之述抄ニ任せ、只往生之直路之正流を相勸候処、種々ニ申立私一人之過失ニ相成国法御条目ニ相背無調法との貴意奉恐有無之御返答一向無御座候

右二通帳場内證と被申末寺へ被渡候とも法傳寺并末寺とも二一向寛無之事故、次下之通ニ返答

(己) (宝曆二年九月十八日カ) 覚書

覚書

前段之通九月七日返答書差上候処、何分可奉誤無左候而

(九)九月十五日法傳寺・末寺惣代、惣本山役者

中へ口上書

願之控

乍恐奉願口上書

一此度伏見表御末方の法傳寺念仏弘通仕候ニ付、騒動ニ及候由被訟出候ニ付、右騒動ニ及ひ国法御条目ニも相背不調法之段可奉誤旨被仰渡候段承知仕候得共、右騒動之儀不存候故被訟出候、御末寺方と対決被仰付被下候様奉願候已上

九月十九日

法傳寺

本光寺

一念寺

惣御本山

御役者中様

(三)十月十一日・十九日 本山へ召寄問答の記

録

者、御難ニ不当候と被仰候故、同十五日末寺且中の伏見騒動と被訟遣候、寺方と対決之儀願書差出候処、是者一段規を越たる願なり、法傳寺の直ニ被出候ハハ可聞届候旨被仰候ニ付、其日直ニ法傳寺末寺兩人連印ニ而願書差上候得者、明日登山可致旨被仰渡翌日登山仕候得者、御役者中列席ニ而被仰候ハ法傳寺者、最初の段々未た自知不被致と存候得者、今一往最初の吟味可致候間、対決者、追而可申付と被仰候故、法傳寺末寺一同ニ何分対決可成候、其上ニ而御尋之儀者幾度も御尋可被下と申候ハハ、夫ハ理不尽之申分也、然ハ先下山可被差扣此方の可申遣と被仰候故、旅宿ニ扣居候、同十八日曉方末寺共の御届申候ハ、明後廿日ハ在所神事ニ而御座候ゆゑ明日の廿一日迄ハ罷帰候、廿二日ニ罷上り候と御届申候ハハ、帳場中被露御役中の被仰出候ハ届之趣尤ニ存候、廿二日罷上り候ハハ、又々可被相届候、さて法傳寺ニ者此間申渡候、思熟被致候て明日ニ而も御返答可被致と可被申となり右之通承候ゆゑ、直ニ又末寺方一ヶ寺御帳場へ差上候趣者、法傳寺思熟仕候ハハ、御返答可申上旨被仰承知仕候、法傳寺ハ此間御願申上候通ニ候と申候得者、帳場中其段披露可致と夫の廿二日迄休日

末寺方罷上り御届いたし候

一九月廿四日御帳場の申達儀有之候間、末寺一ヶ寺差出候様申来候故、登山仕候、御帳場被仰渡候ハ廿六日御参内ニ付御事多候故、廿八日までに御召不被成候間、其旨申渡スト夫の十月十一日まで御召無之

一十月十日御召申達儀ニ付明日登山尤前般之通末寺兩寺可被召出候者、十一日登山仕候、御役中御列席專念寺和尚被仰候ハ其元ハ只対決願旨申候得共、法吟味者其元印形仕御返答被致候上ニ而ト、五種正行之外ハ雜行雜修を打拂書付被申候、此打拂ト云か敵し過るゆゑなりト、選擇三輩念仏章之文之廃助傍之三義之下、上人之御言ニハ但是等之三義最難知請諸ノ学者取捨心ニあるへし、今若善導ニ依ラハ初ヲ以テ正トスト元祖上人さへ若シト云且クト云ヒ恐慮之言ハアリ、志かるに其元か雜行雜修を打拂ひとハかたよる勧め過言ニあらずやとの御尋ニ而御座候、其上随自意を表として随自意失ハぬやうニ勸るか御当山之風儀なりとの事ニ候、

拙僧御答ニも手前書付差上置候御返答書ニも助正傍正通別得失を相弁候上にて、專修念仏を相勸申候と致置候、何分先達而御願申上候通対決之儀御願申候、其段之御尋ハ得御返答不仕と申切候、其趣ハ右御尋之内ニ種々之仰事有之候故、若シ申披仕候得ハ御尋か皆宗祖之正意を間違ニ成候ゆゑ得御答不仕と申罷在候、其故ハ若シトアルユヘ且クトアルユヘト御不審候へハ十八本願も二ツまで、若と被仰四十八願不殘若の不定之御言アリ、其上且クとハ極楽へ往生する迄之間之事ニ候、大凡淨土之三心五種正行ハ

四修を以勸策仕候か習ひかたニ而候故、專念寺之被仰候通ニ而者三心四修の法か破滅仕候得者、全く祖師之正意ニ背候、況三輩章始終之文殊ニ一向專念ニ結皈仕候事ハ文義分明ニ候、一向トハ二向三向を嫌ひ障り心ニ而候へハ、專念寺之仰ハ理不尽と被存候、願文ニ若之言候故願成就之文ニ諸有衆生聞其名号信心勸喜乃至一念至心回向願生彼国之文ニ而若シ之言ハヲ決定仕候、準之彼宗祖之若之言も一枚起請之一向ニ念仏すへしと被仰候ニ而、餘行を打払ひ給ふ義か明らかになれ申事ニ候、其上餘行二十三之失有之候事、三代上人之判釈詳ニ候上者何分專念寺和尚之自己之義難ハ返答致すにも不足事ニ候故、委クハ宗祖之諸伝を見て知レやすく候なり、又片よると被仰候義ハ未本願御信仰無之故ニ候、若片よりてわるきこと被仰候ハハ、阿弥陀仏ハ何の故に片よりて西方ニ淨土を構へ萬行を本願とせず、片よりて只念仏一行を本願と立、諸宗ニ而皆往生すへきニ片よりて淨土宗を立候そや、世間ニ而主君を一人限り夫婦も貞の道を守候ハ、皆片より申こと難く可申故、人皆己か往生さへ大切ニ成候へハ、只眼目をぬらす念佛申す心に成ものニ而候也、夫を兎や角被仰候ハ、我往生の心なく弥陀一佛を大切ニ思召候心なき故と

存するより外之事無之候

一十月十九日七ツ時^カ御召六役中被仰候ハ、対決之儀被願候へとも、未尊命之御返答無之故尊答可被致候と、御答ニ先達而尊答致置候通ニ候、御尋現当兩益之念佛ハ決して往生難成候哉

答云決而往生不許候其故ハ回向心かかけ候故、決而往生不許候、然ハ礼贊之哀愍覆護我ハ何といかん
と、答ニ夫ハ又格別ニ候と役中間違之了簡解尺仕候へハ、一向いづれも無言、扱夫より返答なるともならぬとも書付不被致候而者、僧正前不濟と被申渡候、此方者対決願差出置候故、願之外ハ一草も得書不申と申下山

(二)伏見光月庵水心口上書

左之通認候得共噂ニ而候故、止メになり申候願書心得ニ留記置

乍恐奉願口上書

一肥後町西光寺弟子真行と申発心者、当春々光月庵ニ居申候而、御念仏修行仕度旨相願候ニ付、難有心入ニ奉存候、此上取置候処、此度西光寺和尚真行江被申渡候趣者、其方儀光月庵ニ居申候事、称念寺和尚御見届其

上法傳寺流之念佛を申候故、宗旨印形難成と被申渡候、此儀法傳寺被勸候念仏ハ邪法之様ニ相聞光月庵者紛敷庵之様ニ相聞寺以御公儀様御法度之邪宗門ニ而も相勸候様ニ御聞ニ達し候も恐多く、拙僧身分ニとり歎ケ敷奉存候、依之右西光寺^カ申渡候御召被遊何分御吟味被成候様幾重ニも奉願候已上

光月庵

水心

右

(裏表紙)

宗金寺什物

上中下三卷之内

┌

(表紙裏)

感王政一新之時勢、此三冊奉納竟

宗金寺説普隆音

法傳寺尊公

(一) (宝曆二年) 十月廿日 不退本山へ対決願
の為登山

十月廿日 又候登山昨日申上候通書付差上候儀者、得
不仕何分対決之儀御願申上候と申候へハ、然ハ其方書
付被致ニ而取次可申と申候故、畏而下山

(二) (宝曆二年) 十月二十一日 本山宛対決願
の「口書」并出願記録

口書

一対決之儀願ニ候得共先達而被仰遣候尊難之御返答書御
難ニ不当候間、先此儀を御返答致候ハ、其上ニ而対決

不退上人木魚念仏出入一件史料

願可被為仰付旨被仰渡奉承知候得共、小子御願申上候
趣ハ、右尊難奉恐種々恐意仕御返答書数通差上候処、
何分騒動ニ及ひ国法御条目ニも差障不調法との御咎奉
恐候得共、小子不存儀故迷惑至極奉存候、依之右騒動
ニ及候、被訟出候伏見寺々と対決被為仰付被下候様、
先達而願書差上候通対談被成下候儀偏ニ奉願候 已上
右之通十月廿二日ニ認登山 法傳 本光 誓祐

帳場天了和尚取次御披而訟之上帳場ニテ被申渡候ハ、
此間御役中段々被申候を、法傳寺者自知不被致と存候
へハ幾度も申聞候、此騒動之二字ハ伏見ノ騒動と訟遣
候ニ者無之、御本山末并黒谷・百万辺末ハ其本山々々
江致注進候、右伏見之三ヶ山寺々之騒動ニ及候を、御
前ノケ様ニ騒動致させ候事ハ国法御条目ニも差障り無
調法との僧正様ノ之騒動ニ及ハセ候との御難なるを不
聞分騒動ニ及候と訟候、伏見寺々と対決被仰付候へと
願被申候ハ、強訟ニ而追罰之通ニ候、此願ハ取上ケ不
申候間、勝手次第ニ可被致となり、拙僧返答先達而
段々仰自知仕罷在候、成程僧正様ノ者諸向へ差障騒動
と被仰付候得共、伏見騒動とハ御役所ニ而被仰付承知
仕候、則先日も御役所ニ而騒動ニも重々ノ御座候と申
上候通り、右寺之騒動被成候ハ本在家ノ起たる事ニ

被下候と下山

(三) (宝曆二年) 十月廿六日 鳥羽法傳寺檀中
より本山へ願書

鳥羽旦那中が十月廿六日日本山へ願書

乍憚書付を以奉願候

一伏見御末寺法傳寺対談被仰付被下候様ニ先月十五日未
寺旦那共が御願申上候処、未且之願ニ而者御取放難被
成、法傳寺願ニとて御取放可被下旨ニ付、即座ニ法傳
寺対決之願書差上被申御取上ケ被下候処、未有無之落
着被仰付不被下永々ニ相成、小分之旦那共ニ御座候得
者、法傳寺在京之段相続不仕殊ニ寺役等相欠ケ差支迷
惑仕候、何分急ニ落着被仰付被下候様、乍憚奉願己上
右之通之書付を以願被申候得共席書ニ差支難取上由、
帳場役中へ窺被申候、旦那中段々口上を以帳場と詰ひ
らき被致へとも、兎角此願書ニ而者御取上無御座由ニ
而集會堂ニ而窺書認差遣被申候

候、在家ニかゝり不被成候得者、何も騒動被成候ニ
ハ及び不申、然者僧正様が騒動と被仰出候、申披ニハ
其騒動之本たる寺々と対決願候可申訳仕候也、願を御
取次不被下候上者、もはや致方なく候間、下山仕ると
て、帳場被申候ハ先暫御扣へ可被成と又呼出し被申渡
候ハ、扱々其元我情強く候、是を是を穩当に被致候ハ
右国法ハ御条目ニハ何の障候哉、私ハ心付不申候と御
尋可被申存候ニ、只对決を被願候事、我情ニ候、先ツ
篤と工慮被致御返答被申可然其上御当山末ハ対決も可
成餘山ハ何と可致哉と、拙僧返答成程我情を持候儀者
沙門之有間敷事かやと懺愧仕罷在之候共、僧正様が被
仰存候義者御憐愍が被仰下候儀ニ候へハ、何事も難有
其上三心四修五種正行之外ハ雜行を打除候と申ニ付、
是ニ少しも僧正様が御難之可有儀者無御座儀と奉存
候、是ニ御難を蒙候ハ全く伏見之訟が出候事ニ候故、
我情成程強く御座候、たとひ三ヶ山之御末寺ニもせよ
対決御免被下候得者、直ニ申披き致し就御目候か御答
ニ罷成候、本が対決願を仕候迄ハ種々ニ了簡も仕候得
共無是非刃を吞候思ひニ而、対決願ニ決心仕候得者此
外ハ所存無御座候と、帳場然らハ先下山被成とくと又
工慮被成御返答可被致と、拙僧此願之外無別心候、若
又分別も替候ハハ可申上左様無之候ハ、右願と思召可

(四) (宝曆二年) 十月廿六日 鳥羽法傳寺檀中

本山へ口上書並に本山出頭記録

奉窺口上書

一法傳寺儀御吟味筋之儀ニ付、永々御召登し置れ依之旅宿賄相統不仕、殊ニ寺役等相欠ケ迷惑仕候、其上御大切成御朱印御座候得共、暫時も無住同前ニ仕置候而者、恐多奉存以寔且那共迷惑至極仕候、此上寺相統難仕候如何被仰付被下候哉、乍憚御伺申上候已上、

右之書付を以被上候へハ取上被申候而、段々帳場役中へ取次被申且那中と帳場及対談申候、廿六日昼八ツ半時ノ夜九時前迄本山ニ詰ひらき致居被申候、仕舞ニ者帳場奥へ被引被申候よし下山被致候而旅宿へ一寸立寄被申候

且那中名前、与惣五郎殿、又左衛門殿、六郎兵衛殿、九郎右衛門殿、又三郎殿、善四郎殿、中路平三殿、六左衛門、治兵衛、又跡ノ忠二郎殿、次郎左衛門殿、九郎兵衛

一同廿七日八ツ時申達儀有之候間、末寺兩僧被差出候様申来候付登山被仰渡候趣者、御朱印御番小且那故難儀ニ及と被申上候条尤ニ被思召候間、末寺中ノも相加ハリ御番可致旨被仰渡候、御返答ニ者末寺共者替るゝ御本山へ相詰申候、其上独身同前之寺ニ候へハ大切之御番得御受ハ不申上候、仰ニ得御受申さぬとは何心そや、御答ニ是迄法傳寺住持替之節并に他国他行之節も皆且中ノ勤来候、殊ニ我々共在京仕候留守を考兩三ケ

寺盜難ニも逢申候得共、彼是ケ様大切之儀者何分恐多儀ニ御座候得者得御受不仕と仰ニ兎角先々且中と相談して御番可被勤と申張ニ而御引末寺下山

一同日七半過ノ法傳寺御召登山、御役中御揃専念寺被仰候ハ、毎度対決願ニ候へとも御尊難国法御条目ニ差障候儀御返答無之候得ハ対決難許候、所詮国法御条目ニ差障とハ、或ハ施餓鬼無用之、何るハ神社江參る事無用之、或ハ祈禱百万遍無用之、又者門前他庵ながら尼多く向退致すの小僧とも多く取申杯之事ニ候者、右申訳可被致候、御答ニ流灌頂・施餓鬼・誦經・別時等ハ皆追善作福之通規ニ而候得者、僧門之職分ニ候得者説法とハ各別ニ候、本願念仏ハ別規宗躰ニ候へハ左様之儀者勸メ不申、念仏を相勸候ハ自行往生を勸候、追善作福ハ残る子孫之財施を以法を求候ニ職分之法施を与へ候までニ候、若施餓鬼流灌頂等を致し逆修ニ仕往生を願候て、雜行ニ而候、尋ニ既ニ安心門建立門之立て阿るに、五種正行之外ハ雜行と被申候へハ建立門か欠るはいかん、答ニ建立門も五種正行之中ニ御座候て欠不申、万法を五種正行に撰し申事ニ候、建立門も相弁へ居申候、其段之御返答者得不仕候、兎角対決被成下候上、伏見寺々ニ向ひ一々返答仕、互ニ法之趣対談仕、若此方相違仕候ハハ、法傳寺是迄相勸メ候ハ間違ニ候

被申候法傳寺ハ御本山へ御頼申渡之切ハ、此上ハ平六
めをいたため候致相談と念故寺御好身を申立且那誑惑

(五) (宝曆二年) 十月廿九日 法傳寺末寺惣代
本山帳場へ御朱印御番断書

御朱印御番断書

と申御触を願相改可申候、殊ニ伏見寺々御本山をかき
ニきて在家をおどしすかし、折角御念仏ニ取付候者を
念仏をつぶし、却而御本山御恥辱ニ相成候儀を被申候
而、氣之毒ニ奉存候と申、内々信受院様々被申出、所
詮国法御条目を申も寺法之一を出不申、大形ニ被聞候
ハ不案内也、其元国法御条目ニ被背候事髓ニ有之候得
者、何しニケ様ニ可致置右申ハ背かぬといはるる申分
を聞為ニ候へハ、施餓鬼・木魚・鼠色袈裟等被申訳候
べし、又直ニ者即答も難被成かるへし、御役所なから
手前ハ取次ニ候得者御内定有之候て承るへく所詮其元
所存ニ一物有之上ニ而被申候へハ、夫をくつろけてと
くと何分存寄を手前内意ニ可承候事、取次様ニ相聞候
得共、夫ハ御役所へ手前か申披き致候を種々親切之御
挨拶故押而難申、然ハ下山仕恐慮仕見可申候と申候へ
ハ成程太切之儀ニ候へハ、篤と恐慮可被成と有之、初
夜時分ニ下山

誑惑被致候証拠ハ伏見大信寺御条目事理縦横之誑惑、

自身之事を且那之事ニ故なし仏祖国君御本山を欺き被
申候、称念寺四人と且家之中与兵衛と申者ニ御本山を
かうにきて宗旨印形を被申候誑惑、阿弥陀寺草津のか
ハミとやらん誑惑被申候、西光寺御公儀を誑惑、心行
か子ニ向ひ、念故寺某心ニ付、御本山を誑惑、西福寺

一昨日愚僧共御召被遊御朱印御守之儀被仰付候趣、末寺
共申聞せ候処、是迄御番相勤不申来候間得御受不申上
と申候へとも、御本山々達而被仰付候儀故、且那へ相
談仕候処、且中申候ハ此度御番御勤候者、此以後之御
番等も末寺中へ御渡可申候か、其上此度法傳寺之儀
者、末寺方之外ニ且那役人共老人つゝ罷出候筈ニ候得
共、御收納時分事多故無其儀候、依之末寺方まで不参
之儀者、難為致候間、先且中々相勤可申旨被申候間右
之通り御断申上候已上

末寺惣代

十月廿九日

本光寺

御帳場様

一念寺

(六) (宝曆二年) 十月晦日 本山帳場より召状

一此旨被仰渡候趣被致思熟候て只今登山可被致候已上

帳場

十月晦日

(七) (宝曆二年) 十月晦日 法傳寺より本山帳

場宛返書

返書

貴仰之趣承知仕候被仰渡候儀ニ付末寺中共、種々相談仕候共、何分格別之案功も無御座候、依之昨日信受院^(マヤ)迄御賢慮之御芳意も得度奉存御窺申上候処、未御内意も不承候、小子ニ未別通も無御座候得共、御召被成候ハ、御登山可仕候、其段者追付御窺ニ末寺差上可申候已上

十月晦日

法傳寺

御帳場様

(八) (宝曆二年) 十月廿九日 法傳寺より本山

塔頭信重院宛書翰

信受院^(マヤ)江之手紙

此間者御懇情之御挨拶難有奉存候、依而末寺中共種々旋慮仕候得共、何分格別之工夫も出来不仕、依之御覽置之程も承知仕候ハ、甚幸ニ奉存候、明日ニ而も明晩にても御手透之節、御住院迄参上仕、得御内意度奉存候、右得御芳意如此御座候 己上

十月廿九日

法傳寺

信受院^(マヤ)様

(九) (宝曆二年) 十月晦日より十一月廿七日ま

で本山における吟味取調記録並に返答書

一十月晦日暮方本光寺・西蓮寺同道ニテ信受院へ御内意ニ参候処、未下山不被成候故御伝可申段申候へハ御弟子中御帰之程夜更可申と被申候故宜く罷帰申候

一十一日朔日早朝信受院^(マヤ)へ御使、昨晚者御出之処不得御意、又今日も夜ニ入可申候間、後刻集会堂ニ而御内意可承候間御出可被成候と、依之四時過^シ登山集会堂ニ而得内意候、列座本光寺・西蓮寺、扱信受院^(マヤ)被申候ハ法傳寺和尚ニ者如何思召候哉と、答ニ此間思熟仕可申旨被仰渡種々案見申、其上末寺中共種々相談仕候得共、何分対決御願申^ル外ニハ分別も無御座候、其故ハ第一此度之儀伏見門中^ニ伏見御公儀様へ御届被申候而

法傳寺ハ邪法外道之様ニ思召候、御公儀表も恐多其上寺々在家ニ対し法傳寺之被勸候念仏帰依被致候而者、御条目ニ定而御公儀御本山々追々御吟味ニ逢可申杯被申候故、在家殊外迷惑ニ及ひ中二者、商売之障ニ相成難儀ニ及も御座候、其外念故寺和尚浄土宗之苦提心ハ願ハ此土ニ有て、行ハ浄土有と法傳寺被申候故、けしからぬ事かなと警覺致すなと御本山へ被訟候ハ、全く善導祖元之立法を破滅被致候へハ対決不仕候間者、何分宗門之法則立不申候、且又御役者専念寺和尚之是迄段々選択集ニよりて法吟味と被仰御不審ニ下候儀ともハ皆御間違之様ニ奉存候、右御難法傳寺江者不当、其槌元祖江当り氣之毒ニ奉存候へとも、尊難之両字御座候故、存分ニ者得御返答も不仕、但不苦と被仰候ハハ存分ニ御返答可仕哉、此間も祈禱百万遍無用と被申候得者、御当山増上寺へ差障と被仰候、夫故手前ハ助正通傍正別得失相弁勸候と、先達而々書付御返答申上置候ニケ様ニ被仰候得者、一向法之通別も傍正も相破候様ニ而何分不得其意候、御当山之宝祚延長之御祈禱者二利円満果上之大僧正末世之一佛浄門之大導師ニ而、宗旨興隆之棟梁之御職分護法扶宗之通規則ニ而御座候、其と下賤男女身命貧求之祈禱百万遍と一同ニ思召候ハ、醍醐庵味是を一ニ致すと申物ニ傳候か、其外ニ

ハ伏見寺々種々之儀被仰候事承及候故、何分対決被成下候ハネハ末寺且那之懸合も濟不申候間、御本山御威光を以対決願被仰下候様、宜御披寄可被下と申也、信受院被仰候ハ手前か所存ハ不然、先ッ対決願扣へ尊難ニ騒動国法御条目ニ背と被仰候ハ曾而不覺奉存候間、如何様ニ相背哉と御窺被申可然存候、其上ニ而ケ条之上ニなりて対決願被申可然候、押而対決被願候者役所之評儀ニも法傳寺之強ク対決願被致候者、此方カ伏見と得対決者為致間敷哉と見込て願ハれ候か杯と何れも被申居候と法傳寺申候ハ、全く左様之所存ニ而者無御座、尊難を蒙申訳難立候故不及是非御願申ニ候、勿論伏見寺々ニも決談之ふまへ所なき儀をハ争か御訟可被申、然者浄土宗三心四修五種正行之外ハ雜行と打除き候ニ御難を蒙候事故、手前ハ只法之立た、ぬか為に対決願候也と、信受院被申候ハ、其儀者三心四候五種正行之外、難行と打除候ニ争か尊難之可有之其上不及なから其元段々被仰候、法之上ニハ少も相違ハ無之かと存候、左様之筋ニ而者無御座諸向へ差障候と申儀を御尋ニ候、然ニ強而対決御願候て理の功ずるハ非の一倍とやらん、却而道具落シニも参り候而者、氣之毒ニ存候、其上是者御内々ニ而候、捌口之筋者大方相濟有之候乍併御役所之事ニ候へハいかやうニ参り可申哉ハ難

計候、先々末寺中とも能々御思熟可被成候と互ひニ礼謝之通語早而下山

右三人下山即刻為念記ス

十一月二日九時ヲ登山暮方ヲ御呼出し、善愍寺和尚被仰渡候ハ、法傳寺何分対決御願申さねハならぬと弥そ
うか、答になりと

信受院被仰候、法傳寺先達而も得内意候通本末之儀ニ候間、幾度も申候ケ様ニ列席各仕候ヘハ、役中ノ間違之儀被申候而も、銘々とも承居申候得者、是ハ法傳寺之申候分尤也、是ハ役中申達也と引候而評定致す也、

況其元国法御条目ニ被背候ハ、争か其分ニ致置可申、然者先御尊難之御ゆるめを願ひ此方ヲ尋候、ケ条之面を被相答是々ハ相濟是々ハ相濟不申、何分対決為致不申而者難叶筋者、此方ヲも可申付、又其方ヲも願ひ可被申、其時ハ早速御取立可有之、然者先尊難御くつろけ、御願可申候間、其元対決願も暫くつろけ可被申候と段々宿坊之事也とて被申候故、然者且ク対決願差控御尋を可承、然とも対決之儀者身分計ニ而者無御座末寺且那ノ者又手前へ申訳之為ニ対決被願候、懸り合も御座候得者、何分対決者追而御願可申と申候、其時信受院役者中共暫可被控とて御引、即刻御帳場天了和尚へ被仰出候ハ僧正様へ尊難御ゆるめ之儀願候へハ早速

御許容ニ候、然ハ先対決之願書も差戻し申すと下山

十一月三日早朝後刻八時過登山可致段申参り候得共、

本光寺者在所寺役ニ歸り被申、西蓮寺ハ御国役之儀ニ

付、御公辺へ罷出帰宅難計御断申置候、八ツ過又々今日ハ得御登山不仕と御断り御帳場迄申候

一同四日暮六半時ヲ御召登山御尋五ケ条再吟味、初三ケ

条ハ其分第四ケ条之下神社参詣大峰之下ニ而者、是等

者此方勸化の障ニ而ハ無御座、在家之内浄土宗ニ居な

から念仏者を誇り山伏の真似いたし大切成病人ニ種々

祈禱と号し商売ニ致候者か念仏ハ己の障を心得申ニ而

候、其上手前ハ宗略少マコニよりて念仏者之重病必死之節

之仏神ニ祈候を相誠候、誠ニ出離生死者大切之事と奉

存と申せば、専念寺和尚被仰候ハ成程其元被申候、法

之上ニおゐてハ少も無相違至極なれとも独立之是をい

へ者、却而障ニ成今世間一同ニ斯成故ニ杯と種々輕語

物語同前之事ニ候、又西国之下ニ而者手前者只正雜二

行之篇ニよりて西国と念仏とを心ニ懸候ハ雜行ニ而往

生之障りと申候、殊ニ西国ハ靈地靈山皆々他宗其上餘

佛江日參元祖江無之念仏之衰微杯申候得者、専念寺被

仰候ハ成程宗門所求所婦真行上ニ而いへハ、其元之申

分少も相違ハ無之、然とも西国者国風ニ候へハ一分立

て是をいへハ却而障ニ成候故、手前なども心にハそり

思ひなからも西国順礼ニ出ること、或ハ高野へ骨納メ拾式文目之月牌付与えといへハ、夫ハよき事と挨拶いたさすは先キ之心ニ障故、其元も念仏ハ一代すゝめ被申而も尽ぬ事なれば西国を兎や角といはるゝハいらさるやうに存すると手前申候ハ被仰候通、私ハ雜行と存申候、成程国風と申ものニ而候ハ、御尤と存候と扱此ケ条共手前ハ尤とハ不存候得共、信受院ヲ法傳寺御尤と可被申と被仰候故御尤くんと申候

右之覚書者本光寺・西蓮寺三人之覚ニ候、此外西山体用不二万徳所帰之間違、破邪顯正義之法、なたる船之法語、張公子高か登龍之喩など申候事

右返答書即席可致旨被仰候得共、四ツも過殊之外飢寒候故、御願申明日認可差上と申下山御返答書ハ次之卷子委し

一御尋自坊并光月庵ニ而木魚を仰候事宗義宗風ニ相背候事

御答先達而も御書付差上候通、宗門行儀を相改木魚計相用勤行仕候ニ而ハ無御座、勿論仏具之儀ニ候へ

ハ、勤行之終ニ日所作相勤候ニ小僧共退窟睡眠仕候故抑かせ申候、然とも宗儀宗風ニ相背候間、相止メ

可申段御本山ヲ御申被下候ハ、御尤ニ奉存相止メ可申候

一鼠色縵衣小僧共ニ着させ候事異風異体ニ候事

御答縵衣ハ沙弥衣ニ御座候得者、着用致させ候儀異風異体とも不奉存、其上此儀者去年末寺平僧御咎之節、御帳場心和尚江御窺申候処、小僧之儀者不苦と御申候故、掛させ申候、然とも異風異体と候へハ可相正旨御本山ヲ被仰下候ハ、御尤奉存相正可申候一於境内尼部屋有之、助説之節者大勢隅住致候事、猥ケ間敷相聞候旨、諸寺院を不憚候事

御答先達而御尋之節委細書記指上候通、門前者数百年来屋敷地ニ而在家建双ひ御座候、右部屋と御尋候ハ大沢六兵衛と申仁之隠居ニ而御座候、成程説法仕候節者、諸方ヲ相集り候、尼之内ニ右隠居ニ倚宿仕候も御座候、勿論支配者町之役人共仕候、然とも猥ケ間敷相聞諸寺院江も不憚之儀、御尤ニ奉存候へ者、右六兵衛へも相心得被申候旨可申置奉存候

一諸社参詣并ニ大峰山上無益之被勸候事

御答此儀者職分不明ニ候へハ曾而相勸不申候、但し念仏之行者重病必死ニ及ひ候ニも、除病延寿之祈願を仏神ニ致候事ハ、張公子高か登龍之如く厭欣之信を失ひ候故、浄土宗略抄之御法語を申聞せ相誠申候、又選択本願章を講候節、万徳所帰之下ニ而、柔抄ニよりて西山流万徳所皈と相違ハ申候、然処僧家方ハ

神国之礼法相誠候事 国風ニ相背候旨、御尤ニ奉
存候へとも曾而不勸候

一 西国順礼之儀無益と被申候事

御答念仏之行者現当を心ニ掛参詣仕候へ、雜行之上
往生之障ニ相成候故無用と申候、乍併称名念仏増進
之為、又者他国之風儀靈地靈山拜見之為杯ニ順礼致
候へ、意業不同ニ候得者無用とハ不申、念仏ニ不足
之心阿りて往生之為ニ順礼致候人ニ者、訖度相誠申
候、然共西国順礼ハ国風ニ候へハ一分立制し申候へ
へ、国風ニ相背候間、制し申間敷旨御仰御尤ニ奉存
候

一同七日四時ハ登山九ツ過被仰出候へ、御用繁多待被居
候も、退届ニ而可有之候間、八ツ過登山可致と則下山
仕八過登山、暮六過御呼出し御尋、饅頭屋善四郎妻往
生之節死骸を庭之隅ニ差置候様申候旨、寺法ニ相背候
事弥左様ニ而候哉、若左様無之候哉、善四郎ハ口書取
可差出候

御答此儀者先達而申上置候書付通ニ候、口書取候儀
者、善四郎自身之妻之儀、ケ様ニ被申立口書などハ
致し申間敷、右申入候ハ定而御願可申と奉存候へ
へ、此方ハ者得口書取差上可申とハ御受不仕候と段
々申候処、何分夫ニ而者入組候間、先口書取可差出

不退上人木魚念仏出入一件史料

旨被仰渡、然者御本山御意重候間先ツ右可申聞と申
左之通御返答書仕候、尤此御尋最初者庭の隅ニ置、

縁者何某段々挨拶ニ依而漸々少々隅ハ取出し葬礼勤
候と被仰、此度ハ庭の隅におけと申こと被仰兩度之
御尋相違ニ相聞申候故右覚書仕候

一 饅頭屋善四郎妻往生仕候節、死骸庭之隅ニ差置候様申
候旨、寺法ニ相背候事

御答此儀者曾而無之事ニ御座候、則右之善四郎ハ口
書故追而差上可申候

一次ニ精靈祭之事、鹿末成物を改め珍珠を供すへきよし
相勸候事、此儀甚以国風宗風ニ違し候、本ハ何代之帝
ハ之御勅ニ依而祭る事也、有来候鹿末成物を以祭るを
古法を申候、然るを鹿末なり清浄也と云ハ古法を差い
ろい候儀ハ、国風宗風ニ相障候ニ入さる世話と存する
也と

御返答ニ然らハ拙僧ハ一口も方法之儀ハ申事ハなら
ぬ筈ニ候や、又在家供養之行儀ハいかやうニ成ニ而
も不苦候や、其うへ一年程度之自恣之齋会ニ候得
者、太切ニ恭敬して尻くゞり瓜三ツよりハよき瓜一
ツ清浄ニして相備候様と教候へ、住持師且之職分ニ
而候処、然者手前カ職分を御やめ候のかと何れも返
答無之候

次ニ永養寺被仰候ハ、さて清淨ニせいといはずとも糊經ニランサンハラ／＼と云か清めるの也と、拙僧答ニ然者鹿末成物を備糊經ニ清むへきそと勧め可申敷ケ様之事を申訟候人ハ己か自墮落者不成者之申事ニ而候、
(マ) 三宝供養之儀、争か不申して可居哉と申候得者、信受院被仰候ハ、

法傳寺者經論之心ニて被申候と存候、ただ無間之事ニ而返答書可被致と、又永養寺被仰候ハ鹿末成物を改めといへは、貧家杯之障機をもたすに非すやと、御答ニ成程

分際莊嚴分際供養ニ候へハ、貧家夫々相応之物を清淨ニ改、供すへしと申せハ機ハもれ候ハす、是等之御吟味者、出離生死之障と成候事御座候、是者御吟味者被成候ハすやと申候得者、知恵光院被仰候

先ツ返答書可被致と御答、御返答書ハ

委敷御書付を、後可致と事供養なとを可申存候へと理供養も、又信受院御差圖なされ世間之事ニ而返答可致と被仰渡候ゆゑとかく御本山之儀ニ候得者、如何様成共と申左之通御返答書仕候

一精靈祭之事鹿末成物を改、珍味を可供由相勸候儀、古法を改差いろひ国風ニ差障宗風ニも違し候事

御答此儀鹿末成を改、珍味を可供よし相勸国風宗風

ニも違し候儀ハ不存、則只恭敬叮嚀之儀を申迄ニ候、全く古法を相改ハ不法候、然処右鹿末成物を改珍味を供すへきよし相勸候ハ国風宗風ニ違し候旨被仰御尤ニ奉存候
 初夜過下山 一念寺

誓祐寺同山

右様之事ハ皆無間之通規ニして各別太切之出離生死とハ難混事ニ候を、雜行を許シ相勸候事ハ御吟味無之、扱々浅間敷事ニ存候

一十一月八日伏見饅頭屋善四郎口書ニ付本光寺・西蓮寺・天然寺、平六方へ参り致相談候処、平六初二町之用人ニ様子申善四郎方へ口書之下書為持遣候処、善四郎ハ得心致シ候得共、甥之伊右衛門申候ニ者、此儀者段々様子有之候得者、此口書ハ何分致間敷由平六迄申越候ニ付、天然寺を町之年寄方へ遣し、右之様子を申、善四郎へ被申付候処善四郎年寄江申候者、此儀ニハ様子御座候間、たとひ町内を立退候而も此口書ハ得仕間敷と申由を天然寺へ年寄被申候故、又本光寺・西蓮寺・天然寺三人とも二年寄へ参候而、初善四郎者口書致候様ニと申候処他町之甥之伊右衛門参候而致間敷と申由、他町之者之申儀ニ候へハ、町之御役之分も立申間敷よし、又事ニより候へハ御役所江も仕候筋ニも成可申候間、此方共其元へ為念今一応右之儀御届申置候

間善四郎を今一度御呼候而口書弥致申さぬや致候や、
御聞被下候様ニと申候故、又善四郎被呼候処、甥之伊
右衛門付来り何角段々理窟張候而、一同善四郎ニハ物
もいはず彼是申、何分此儀者道行御座候間、何方迄
も罷出、此通り申開き可申よし被申故ことはつめ置罷
歸り申候

一 霜月十日法傳寺風氣故御断申上、同十七日少々快氣
仕候、長髪ニ而も御登山可仕哉伺申候処、十八日晚方
御帳場末寺一ヶ寺御召役中ニも風氣不参ニ候間、其
旨申渡スト

一 霜月廿日御召状明朝飯後如前般登山可致旨暮方申候
事

一同廿一日一念寺召連朝飯後登山仕候処、役者中未御揃
不被成候間、九ッ過登山可致旨帳場天了和尚御申渡候
故、下山九過又登山仕候、八ッ遇御呼出し信受院ハ
不参永養寺和尚被仰出候ハ、先達而木魚之事相尋候
処、御本山々可相止旨被仰候ハ、相止可申と被申候、
然とも是迄抑き被申候事、異風異体ニ候得者、是迄抑
候儀、御尤とか無調法とか返答書可致也と

御答ニ木魚を抑き異体之事を勤候ハハ、異風とも可
申敷、只念仏日所作相勤させ候ニ声を助遣候得者、
勤行終ニ抑かせ候へとも、御本山々異風異体ニ候得

者、可相止被仰候ハハ、御尤ニ奉存相止可申と申か
御返答ニて御座候

專念寺・永養寺・知恵光院被仰候ハ木魚ハ仏具ながら
鎮西一派ニ不用、たとへハ浄土宗ニ真言宗之如く護摩
壇をかさり勤候ハハ、一宗々為勤可申敷、木魚も左之
如く鎮西一派ニ不用候へハ異体異風ニ非すやと

御答護摩壇とは各別ニ御座候、木魚を抑き日所
作念仏を勤候ニ声を助遣申候故抑かせ申候、本々宗
門行儀鐘を止め木魚計用候ニ而者無御座勤行終ニ抑
かせ申候

專念寺被仰候ハ、所詮木魚是迄抑候ハ異体異風を御答
御尤と一筆可被致ケ様ニ申候と、其元学者ニ不似兎角
被申候事如法ニ無之候、左様ニ被申候而者席も見苦敷
不ていふりの申事同前ニ候と

御答私ハ不ていふり同前ニ候、然るに伏見表より数
多之ヶ条書被訟候ハ不ていふり同前之願方誠ニ生死
を大切ニ奉存候、沙門之訟とハ不奉存、其上宗門法
則等願をつぶされ候寺方ハ御吟味不被成、又私是迄
之申訳ハ一向御聞届も不被成下と奉存候、木魚抑異
体ニ候ハハ御末寺之内私計ニ而も無御座候、兎角御
返答ハ得不仕候と申候

教安寺和尚被仰候ハ成程御末寺之内ニも木魚抑き候寺

とも可有之候へとも、ケ様ニケ条ニ不書出候へハ吟味者不致、所詮先其元一人之申訳可被致なげ申訳ハならぬ

御答ニ所詮御尋段々変化仕候故得御返答不仕と、一念寺申候ハ先此御返答ハ被成間敷候と

専念寺・永養寺両和尚殊外御怒リニ相見候、末寺も一味同心して事を六ヶ敷申候、夫帳場法傳寺末寺一念寺一向御返答者致さぬといふ扣書可致と

法伝寺申候ハ末寺惣代ニ遣申候へハ、惣末寺ハ卒忽なきやうニと申付て御座候、所詮此御仰ハ伏見願書と割符御合せ被成候、思召と被存候得者一筆も得書不申候

夫ニ而者濟ぬ先集会堂ニ可被扣と暫く有之、帳場被申渡候ハ今日ハ晩景ニおよひ候、下山可被致又御召候ハ、登山可被致と畏而下山七ツ半過

今日教安寺和尚被仰候、喩ハ盜賊致候者が捕られて盜賊ハ悪敷とて向後相止メ可申と申訳致して相済可申敷、木魚を押し候か阿しくハ相止メ可申と返答被致候も理ハ一ツ也と

御答夫と是とハ又格別はハ念仏之助けに用ひ申迄ニ候と申せハ役中声を揃へ是ハたとへなりくと

右之通ニ而廿七日迄ハ一向御召も無之候

一霜月廿六日暮方旦那中五六輩旅宿へ被立寄今日御本山へ先達而被仰伺ひニ罷出候処、御帳場中御役所へ引込良暫御相談之躰(体)と相見候而、其後御出被成段々此方申上候事を彼之是之と被仰一向取所もなき被仰分少も筋聞え不申候、其上伺書とも先張場ニ預り可置なと御申候故、伺書此方へ申請罷帰候、ケ様之体ニ候ハハ中々埒明候事ハ有間敷奉存候とて種々物語即旦那中窺書被見仕候故扣書致置候

乍憚口上書

一先達而申上候通法傳寺御吟味御落着之儀、先月廿六日書付を以御伺申上候処、近々ニ御落着可被仰付之旨被仰下候処永々御沙汰不被仰下候ニ付、其後兩度罷出御伺申上候へとも、何分御落着之御沙汰無御座迷惑至極仕候、当十五日罷出各々様江御直談之儀奉願候処、御式日之儀故、御直談難被下之旨、被出候ニ付、今日罷出候、最早此之寺相統難仕迷惑ニ奉存候間、此儀ニ付御直談仕度奉願候已上

申十一月廿六日

法傳寺旦那惣代

御本山

御役者中様

右

一同廿七日五ツ過只今末寺一僧差出し候様、御本山ハ申

来候故、一念寺即刻登山為致候処、御帳場ニ而被仰候趣僧正様御病氣御太切ニ及候故、暫御召出し無之候間其旨可被相心得段申渡候と被仰出候故、承知之上法傳寺御機嫌御伺ニ又即刻登山、只今僧正様御病氣御太切之旨承知奉驚候、御機嫌御窺ニ御登山仕候と行者伊豫着帳可仕旨被申下山

(5) 伏見寺社方仰渡控

伏見御寺社方三郎左衛門様被仰渡候控

一伏見三栖半町堺屋善四郎妻相果候節、死骸を庭之隅ニ差置相吊候様、伏見寺々々本山へ被訟出候ニ付本山が法傳寺へ御申付、庭之隅ニ不尽と申口書善四郎が相取可差出旨ニ候故、則旦那寺天然寺へ法傳寺が申付候処善四郎口書不仕候ニ付、伏見御公儀へ御願申上候処願ハ十一月十四日ニ罷出候、同廿五日御召出被成候而御寺社方三郎左衛門様被仰渡候ハ善四郎へ口書致候様ニ申渡置候間相對仕口書取可申被仰渡候故、直ニ善四郎方江罷越相對仕候処、先住ニ申分有之由を申口書ニ色々之雜言を書加へ候故得取不申、又々兩度御役所へ御願申候へとも、毎度相對可仕旨被仰渡又晦日ニ願ニ出何分口書致候様被仰付可申下候と申上候処、三郎左衛

門様被仰候ハ、所詮此事ハ殿江も御披露申上候へとも御吟味難被成候、其上此口書無之候而も、法傳寺本山表之申訳ハ相立可申と存候、其元方ニもケ様ニ心を碎き段々被願候も法傳寺を大切ニ被存候故を此方ニも申居候、然共此事是非ノ吟味致候得者、善四郎ニ水ニ而もくれ候ハ不成候、左程ニ致吟味候而、所詮か益之なき事ニ候、其上天然寺先住被罷出らるも水掛論ニ而取所もなき事ニ候、成程其元被申候得者、善四郎と伏見寺々と一味之様ニも可被存候へとも、詮ずる所此ケ条一ツ吟味致候而、是かやくたいもなき事に相成候へハ数多之ケ条も皆如此やくたい事ニ相成候へハ、左すれハ達而吟味致候へハ中々異な物ニ相成候故、何分双方御吟味者難被成候故、兎角相對ニ可被致候、幾度御願被申候而も此ケ条ハ御取上ケ御吟味者難被成候と被仰渡候故、無是非相引ニ而其趣京都御役所江も御断申上候、委ハ下書共別紙ニ御座候、是者西蓮寺晦日ニ被出候仰之趣を覚書ニ致置候、西蓮寺申候ハ口書ニ異なる葬礼之致方又御頼故、書て進するなと書申候故何分得取不申候と三郎左衛門様被仰候ハ御頼故と書ハとて御頼内ニ候へハ夫か障ニ者成間敷候と西蓮寺申候ハ、御頼被成故致遺すト候へハ庭之隅ニ差置相吊候へとも、置ぬと書くれ候様ニ相聞へ申候と三郎左衛門

様成程被申候得者、左様ニも相聞候と西蓮寺申候ハ、異成葬礼之致方と書候事、善四郎・伊右衛門町内之者共之了簡とハ不奉存、是則伏見寺方と善四郎・伊右衛門一党仕認メ候様ニ奉存候、其故ハ伏見寺々々本山へ被訟候、数多之ケ条之内夫々異風異体と申事御座候、是ヲ照し見候ヘハ何とやらん怪敷奉存候と三郎左衛門様被仰候ヘ、成程被申候ヘ者、此方ニも心当りも有之候、何分当御役所ニ而御捌不被成候故、致方も無之候と、又仰ニ法伝寺も召出し御吟味も被成下候様ニも可被存候ヘとも、未知恩院表吟味中之事ニ候ヘハ此方ニ而御取上者難被成候故、願書ハ差戻し候と

(一) (宝曆二年) 極月廿四日 本山より呼出し
廿五日法傳寺登山のこと

一極月廿四日八半時御本山御帳場ヲ申達儀有之候間、末寺同道明廿五日四時登山可被成候と申参候故、廿五日四時御登山仕候、八時御召出し六役・山役中御列座ニて御月番知恵光院被仰渡候趣左之通

年末ニ及び御本山表も御用繁多、其上僧正様御病氣ニ候ヘハ、御吟味中ニ而者候得共、一先ツ自坊へ相引越年可致と御仰候故畏而御請申上候、次ニ御申渡擬未吟

味中ニ候ヘハ他行留被仰渡候、尤勸化説法其外諸法事等も大勢人寄セ候義相慎シ可申直且中并末寺且中葬儀等も自坊ニ而焼香可致、御公儀御年礼御地頭御年礼等も役僧を以御断申上候様ニ可致候、末寺も右之趣可相心得、扱春ニ至重而御召候ハハ速ニ登山可致候事、落着之上ニ而帰寺被致候ハハ右申渡ニハ不及吟味中之事ニ候ヘハ、右之通被仰渡候也と法傳寺御受申上候者、被仰渡之趣奉畏候、御吟味中ニ候ヘハ勸化説法等仕候儀者奉畏候、葬式之儀者法傳寺境内ニ者古来ガ氏神之御旅所御座候故、新亡之式等者不及別ニ葬所御座候故自坊ニ而相勤候様被仰渡候ヘハ、寺役難相勤其上手前且那ガ者折々一ちやう切にて申説法事等仕候、ケ様之儀も相欠候而ハ所詮帰寺仕候而も益なく奉存候得共、拙僧儀者矢張京都ニ而越年可仕奉存と御答申上候処、西蓮寺後口ガ先御受可成と被申候故、成程ニ而御座候ヘとも、寺役欠候而者無益存候と又申候得者、知恵光院其外御列座ガ被仰候ハ墓所もちかくならハと、さて長香寺被仰候ハ、所詮旅宿ニ越年被致候となりと、夫ハ勝手次第ニ候ヘハ年末年頭等之用向も京都旅宿ニ被居候而者、思様ニ有之間敷、殊ニ御本山も春ハ御忌御法事彼是正月一月ハ御沙汰も無之候得者、先三十日餘も御召之無之事ハ見へてあり、其上僧正様

病氣御忌之御勤も難被遊程ニ候へハ、御用捨に而歸寺被致候様仰出候事ハ歸寺可然と西蓮寺申上候ハ被仰渡之趣法傳寺御受可被申候、然ら者御本山御年礼ハいかゞ可仕候哉と、善惣寺被仰候ハ未落着無之候得者、夫も先つ落着迄ハ延引候、又法傳寺御伺い申候ハ、御公儀御本所江者役僧ニ而御断申上候様ニと被仰渡候、然らハ御断申上候計ニ而御礼ハ勤間敷御座候哉、御列座被仰候ハ役僧ニ而御断申御礼可被勤候、夫ハ其元了簡ニ可有事、或ハ病氣と成共、或者ケ様之儀と成共御断申上御礼可被勤事也と、扱列座方被仰候ハ、先々被仰渡候趣、御受被申候而其上ニ而又々願書ニ而其方之存寄とも書付可被願と法傳寺・本光寺・西蓮寺奉畏候と御請相引申候、廿六日歸寺

下冊

(表紙)

(貼紙)

金

開山不退上人本江山
被召出問答之一件記

下

元譽貞 □

(表紙裏)

「感王政一新之時勢此三冊奉納焉

宗金寺説譽隆音

法傳寺尊公

┌

(一) (宝曆三年) 十一月廿四日 法傳寺本山へ

御返答口書の写

御返答

口書之写

下鳥羽村

法傳寺

其方說法之致方一宗之表、爭論之縁たるのよし、本山が相咎候様之勸方不慎之到ニ候、乍然其方儀者祖師之正意を演説致候段申争候、左候得者右之趣於本山得と可申明儀ニ候、如何心得候哉、此儀拙僧演説仕候者選択集并ニ円光大師之翼賛・語燈録・三部之抄等ニよりて専修念仏を相勸候、依之本山表江右之趣御返答仕候処本山が被申候ハ、其方勸方ニおゐて相違者無之候得共、伏見表門中騒動ニ及び種々訟候、ケ様ニ而者御国法ニ背き御条目ニ障不調法之勸方奉誤一向有無之御返答者無御座候と誤証文可仕旨、強而被申聞候ニ付、難儀迷惑ニ奉存、又候御返答仕候ハ拙僧演説之儀者、祖師之述抄ニまかせ廢立助正傍正得失通規別規等相弁候上ニ而、専修念仏相勸候得者、依之御国法并御条目ニ茂相背候儀者、不及是非奉存候ヘハ、如何様ニも被仰付可被下と申上候処、役者中が被申候ハ何分不調法とか、誤とか、口書不仕而者、難成旨被申候故、迷惑餘り、志かれハ右数多之ケ条書を以訟被出候伏見寺々と対談被仰付可被下候と願書差上候処、明日登山可仕旨被申渡候ニ付、翌日登山仕候ヘハ役者中被申候者対談願相引可申旨被申渡候故、奉答対談相願候得者、役者中被申候ハ其方儀御国法御条目等ニ者、不相背候段者、此方合点之上ニ而申渡候間、先対談願を暫差控御国法及御条目ニ者、不背と云返答可致と強而被仰渡

候故、暫対談願を差扣申候、然処伏見ケ条書之内が別ニ八ケ条再吟味被成一々返答仕候、此度追寺被申渡候故、拙僧申上候ハ御末寺ニ罷在候得者御請可申上候得共、右相手伏見門中と対談被成下候上ニ而、如何様とも被仰付可被下と申追寺之儀御請不申候

一 一宗之勸方ニ引替り候、勸方ニ候ハ、本山又者一宗之碩学方江兼而申達請許容可相勸儀ニ無之候哉

此儀一宗之勸方ハ関東修学之節一宗之奥儀を相究一宗之相伝を申聞候事ハ、全く衆生教化之為ニ候、依之一宗相伝之通祖師之本意約し念仏往生を相勸候、

少茂宗門之勸方相背候勸ハ不仕候、若一宗書籍之上ニ不害成所も候ヘハ一宗、湛能之学者ニ相尋候事杯も御座候、然共格別ニ碩学之許容を受勸化仕候儀者無御座候

一 知恩院門下ニ在寺之事ニ候ヘハ、何連ニ茂本山之命ニ不相随候而者、本末之式不相定候此儀如何心得候哉

此儀末寺ニ在寺仕候得者、本山之衆ニ候ヘハ如何様之儀ニ而も、違背者不仕候、然れとも法之上ニおゐて方儀門と別軌念仏往生之勸と混同して御条目及御国法等ニ相背候と御咎被下候儀者、宗祖之正意相隠れ候故、右之申訳を仕候、全本寺之命ニ相背不申候一寺法式之儀於公儀強而不取繕事ニ候、乍然本山之申渡

を不請段願有之且ハ及吟味候、此度其方不相請心底之程當り障ニ不抱可申聞候

此儀拙僧心底ニ不請之存寄ハ全無御座候惣本山ハ被申候儀者、何事ニても奉畏候、然共拙僧從來宗祖之正意を相勸候処、此度伏見表門中ハ傍難を被申訟、依之其傍難を訟候仁ニ対談不被成下候而、追寺被申渡候儀を相受候得者、此以後宗祖相伝之正意者難勸相成、還而随化対機之勸カ一宗之正意之様ニ相成候事敷敷奉存候故、右伏見寺方と双方対談被仰付被下候上ニ而、拙僧不調法ニ相究候ハハいかやうとも被仰付候儀を違背ハ不仕候

一此度いか様ニ相分り候ヘハ其方納得候哉

此儀拙僧所存全存奇無御座候只弘メ候法ニおゐて申分相立候ヘハ自身之思ハ如何様被仰付ニ而も違背者不仕候

一是迄追々於本山吟味之趣帰伏不致趣ニ相聞候、右者何々之子細ニ依而不心得候哉

此儀本山表ニ而御吟味を蒙候ハ、惣而卅七ヶ条ニ而御座候、右ヶ条書之内ニ念仏ニ木魚を用ひ候と小僧共ニ縵衣を着用致させ候、二ヶ条ハ顯然之儀ニ候、其段ニ一宗之法之相違越御吟味被下候処ハ伏見表之訟被申候儀、却而宗祖之法則を惑乱被致、其上本山

不退上人木魚念仏出入一件史料

役者中ハ御咎被申度候趣者、宗祖江相当り其外之ヶ条共ニ者、於拙僧ニ兼而不存儀共も御座候を役者中ハ者、何分其方か申たるとの御吟味故迷惑仕依之右訟之仁ニ対談致し候様御願申候而も一多之相違ニ候ヘハ多勢ニ無勢其方か不調法と被仰相手之御吟味者不被成候故、偽ニ対談御願申候ヶ条之儀者一々委ハ覺不申候、右之仕合故何分得御受不申候

一伏見門中之儀此間も申立て右者誰々と対決致度候哉

此儀誰々と申別ニ申定候ニ而者無御座候、右ヶ条ニ拙僧不存事を申又法ニおゐて、相違之儀を訟被申候寺々と対談仕度奉願候、然とも伏見門中一党之申事ニ候得者此方ハ各別ニ名をさし相願候ニ而者無御座候

一其方勸方者師匠在命之節同様ニ勸メ候哉

此儀弊師在命之節者関東修学中ニ候故、師之勸方ハ不承候、帰国仕候節者師老袁仕演説者不仕故、又不承候、只且林之相伝ニ任セ宗祖之書抄ニよりて念仏を勸申候

一其方勸方者来世之儀を專一ニ申聞し今日之儀を打捨候趣ニ相聞候、左而ハ諸向江相障御国制ニも差障候儀を如何相心得候哉

此儀来世を專一ニ相勤候ハ沙門之職分ニ而御座候得

者、演説之席ニ望候節者、念仏往生を決定致候様ニ相勤候、然共念仏之行ニおゐてハ一切之俗事を妨ぬと申か第一之安心ニ而候得者、今日を打捨候儀者曾而無之仏法と王法ハ車之輪、鳥之両羽之如くと申事ハ諸国一同之習ひ方ニ而、今日を打捨候而者来世之法難成候故左様之勤者曾而不仕候、次況や御国制ニ差障候儀者、恐多儀ニ候ヘハ来世を願候者ニハ倍御代国恩を存候様ニ申聞候、併念仏往生を勤候ニ者厭穢欣淨ハ一宗之惣安心ニ而候ヘハ来世を專一ニ勤候上ニて今日之儀者御代之御恩を蒙今世安穩在命仕、其上ニ来世迄往生仕候法を修行仕候ハ、全く御代之源恩と今日と相守相慎ミ候を通軌と仕候得者、来世を勤候ヘハとて少茂今日之儀者打捨不申候

右之通少茂相違不申上候、前段ニ申上候通何分伏見門中対談仕候上ニ而私之不調法有之とて、本山ハ如何様とも被仰付候様、少も違背不仕候間乍恐此段宜奉願候

西十一月廿四日

法傳寺

触 誉

以上

(二)宝曆二年九月廿七日 伏見黒谷末寺ハ本山

黒谷ヘ訴状写

宝曆二年九月廿七日

伏見黒谷末寺ハ本山黒谷ヘ被願候訴状写

乍恐御訴申上候事

近来於伏見表法傳寺派と号し勤来候、浄土宗之風儀を致改革、町家ニおゐて連中を結び、木魚を敲き念仏致修行者数多有之候、其教化師を尋るに知恩院末寺鳥羽法傳寺住持ニ而候、此法傳寺ハ三ヶ年已前大阪天満於新地一字を建立宗金寺と号し、専元祖之正意と申立宗旨之風儀を改致勤説候事共相障候訳其聞有之ニ依、大坂表百万遍・黒谷両門中ハ右法傳寺勤化之趣、我宗自立之ヶ条書を以御奉行所ヘ出訴可有之段、知恩院末役寺ヘ被相届候処役寺おゐて公訴之儀被相頼延引早々知恩院ヘ被申上候、法傳寺被召出御糺明之上向後他所ニおゐて致説法候事御停止被渡候儀相違無御座候、就中於伏見法傳寺説法仕候ハ四ヶ年以前説法之品如何とも未相知候節者、御末寺浄雲寺ニ而為致助説候之処、宗門之儀致違背候事相聞早卒門中説法為相止申候、然ニ伏見表法傳寺并ニ末寺之且那

有之其者鳥羽へ參詣致帰依候故ニ候哉、一兩年ハ法傳寺講と申者廣多ニ罷成候事、知恩院末寺檀家ハ法傳寺講ニ加入致し佛檀佛具を改、位牌之供養靈祭杯不致、世上ニ不順国風ニ違ひ異体ニ相見候間、從彼寺被及穿鑿候処及没著、右之且家改宗仕候之由、因而於当所自他道俗法傳寺派之念仏を通途宗門之念仏と称名と申様優劣之沙汰を致し、流行謔同前ニ申颯、依之伏見表知恩院末式十四ヶ寺一同ニ申合、右法傳寺自立企、猥ニ致勸化候儀御吟味被成下候様被訟上、猶又当所御奉行所へ其段届被申上候、然者於知恩院先比ハ法傳寺被召呼御判談御座候儀、甚及難渋廿四ヶ寺之願筋者、何とやらん不相叶候様ニ風聞仕候へハ、定而於知恩院法傳寺自立之異義御許容可有之儀とハ不奉存候へとも、萬一風聞之通り法傳寺申訳相立候て、当所在家之者共、法傳寺之勸方ハ正道ニ而有來候淨土宗之勸方ハ不正道之様ニ存候而者、恐多儀ニ御座候得共、一宗之頽廢之様ニ奉存候、法傳寺儀末寺住職之身分として從來勸來候宗旨之風儀を致輕蔑我意ニ募り佛檀佛具之法器を容易に改之、御本山方之御制条をも不恐之無顧之悪人宗中之怨敵かと歎敷奉存候間、御訟申上候条宜御聞届被成下、今般当所知恩院末願之通相立向後背風之儀、自立を企異体之勸化仕候撲曾而無之様ニ御本山様ハ急度御詮議無之候而者、同所同宗之御門末相立不申候様

ニ奉存候間、当所百万遍御門中一樣ニ御本山へ御訟被申候儘、此段宜被仰上可然御計策被成下候ハハ難有奉存候

月 日

已上

(三) 伏見福藏院へ示す文

伏見福藏院江之示文

仰られ候まゝ申進候、扱ハ福藏院に対し全く念仏ハ不勸十念も不授日課契約も不致候と一筆書き進候事ハ世に易き事ニ候、書付て候へハ定而何方江も披露あり度申訳と相聞候、しからハ御身分ニ取てハ念仏往生と申事を左程話間敷義とまて思召候哉、又其書付にて念仏申候を殊ニ吟味致し候人ハ何たる仁にて候や、餘りに不審敷事にこそ候へ、抑念仏往生と申事ハ釈尊大悲本懷之大法、弥陀本願の妙行に候て、一切之出家在家貴賤賢愚老少男女之差別なく此度生死を出離せんとおもふ輩ハ行住座臥に此名号を修すへし、身持にもよらず心持にもよらず煩悩の薄き厚きにもよらず、罪業の重く軽きにもよらず、只心に死なふ時往生せんと思ひて口に念仏申迄にて一切の障をなくさるゆゑに他力易行不簡拙の本願とハ申にて候なり、されば宗祖之法語にも念仏申機ハ多く生れつきの

まゝにて申せとこそ仰候ひし也、夫に御身に限り念仏が障となり候事ハ世にも心得かたき事にて候ものか所以いかんとなれハ生者必滅ハ世界の理数也、生老病死ハ衆生のありさまなり、大凡三界の衆生の念仏をはなれて生死を出るの道ハ阿りかたけれハなり、其旨三国の諸伝ニ明かなり、しかるに其法を弁へさる人ニ又ハ現世の法義執する人は後世者といなみ、浮世の法を執する人ハ現世を祈る人をいなむ、ともに偽執なり、ともに恐るへし、ともに法僉を滅するか故に、若夫今世に着さる人にむかひて雷光朝露の身命なれば仏神に祈るとも夫にハよるまし祈るによりて病も治し命も延る事ならば、誰かハ一人として病も死る人あらんや、たとひ命延たりとも百年にハ過へからず、おもへハ夢中乃榮花なり、夢中の榮花の為に一生身をくるしめ、其上後世を阿やまらんハ小利大損に阿らずやと、おしへんに後世心なき人豈是を信受するへけんや、亦後世に篤信なる人に向ひて日月星辰を祭り天部を祈り富貴延命家内安穩などの事をおしへんに此人何ぞ信受すへけん、是ともに其志す故別なるか故にその法も又同じかるへからず、然るに御身ハ今世を祈る法を表とする人也、我ハ生死無常を勤て後世を祈る法を表とする仏弟子也、御身ハ病を除き寿命長久らしむるを修儉の功とし、我ハ病を死の花なりと教て正念に往生

するを功とす。其利益格別なる事海陸道はなるかことし、然らはいふへし異門の鑑を以異門を拒へからず、あらましを見聞するに今世を祈る人ハ後世者をいとひ、後世を願ふ人は又々今世者を忌む、是則執法各異の迷ひ佛ハ是を嫌ひて人我無明を払ひて人法二空を觀せしめたまへり、去ながら此迷ひを断せん事ハ御辺や我身の分にあらず、誠ニ執法異見の断しかたき事、例せば彼の韓非子にいへるかことし、輿人成レ輿則欲ニ人之富貴一匠人成レ棺則欲ニ人之夭死、非ニ輿人之仁而匠人之賊一也、不レ貴則輿不レ賣、人不レ死則棺不レ買、上、孟子モ又此夏ヲ盡セリ、曰、失人豈不レ仁ニ於函人ニ哉、失人唯恐不レ傷レ人、函人唯恐傷レ人、巫匠亦然、故術不レ可不レ慎也といへり、此一章今日御身の意地と我身の意地との内證善美盡せり、然らば他を拒事を体して以て術慎へきものをや、此故に仏道修行の掟ハ一心に一法を行するを第一とす、若心に二法を兼れば彼列子に言如く鈍と鎧と共に商ひし人、客に一向せられて大ニ窟せしためしにおつへし、此をもて我先徳ハ後世を祈り兼て現世を祈るハ船をつなふて棹さすか如しと禁しめたり、若シ一法によりて修せされは方法を知る事かたし、何れの法にも阿れ一法を修せされハ、万法の徳自然に備る、例せば古人の一心を以て百君にハ仕かふへし、百心をもて一君にはつかへかたしと

いかことし、世間の道にも貞女二夫に見、二夫に交れハ貞女の道立かたしといへり、況や離解脫の一大事をや、しかるに我が身のさきハ進てハ分ニ国君の聖恩を報する功なく、退てハ空しく檀越の信施を受けて三世に回するの徳なし、姿ハ黒衣なりといへとも、心ハ白俗よりも濁れり、身を慎ハ則名利の爲也、かかるゆゑしき僻ものなれはとおもふにつけても、せめてハ深き淵薄き氷もふまぬ御代に生れたる身の得分にハ、さかんなる法水に沿して一生を空しく過ぎず、仏祖の教に任せて専修念仏を自も信し、他にも信せしむる程の勤より外にハ、万に勵ミ及たるかたなければ、かの大悟小節にかゝらす大功ハ細縵をかへりみすといふ古語にならいてよしや此世はとてかくてもありなん、往生極樂はかりにて此世に生れたる思ひ出と真平に願ふにて候なり、もとより八万四千の法門ハ、死の一字を説給ふと見るか、念仏者の眼のつけ所にて候、扱ては一枚起請・選択集と申書か貴く相成候へ、是等ハ我身の分を申にて候、扱又御身も浄土なりと御申候ひき、しからハ修イマ練行ハ先祖の家業といふへし、然らハ家業ハ今世の営イマなり、念仏ハ往生のために修せん何の故障か候へき、然るに山臥の上にも死候時にハ、僧家を頼ますして別に引導の法ありと仰候には殊に覺束なく候へ、もし別に法あらは亦別に宗旨ある

べし、何そもし別に宗旨あらは御身ハ浄土を宗旨としたまふや、無益の申事ながら返すくいふかしき仰事ニ候か、予に對し何の爲に如此仰候そや、心得かたくては候へ、浄土宗と仰候故、我ハ念仏勧めたるにて候ニ、其念仏変改して勧めぬと云書付を得たきと仰候ハ、扱ハ念仏ハ仏法にあらずして、邪義邪法と相聞候、何とも心にき仰事とおもひしとこなる申事ながら我が勧る専修念仏の大法は十方世界諸佛浄土の并をも皆悉く信受して極樂往生を願ひ給ふ、甚難不可思議の名号なり、諸仏并諸天善神常隨護念の王三昧なり、何そ人の不信に駭て我仏祖の教を捨んや、況や仏法ハ因果因縁を本とす、是の法を信せぬ人ハ往生に因縁なきなり、況や渡世にかかへりて後世をわすれんは全く因果の理にくらきか故也、禽獸虫類まで皆悉くおのれくの果報を得て生を受たり、いかにはんや人間に生ずる福力をや、過去の因宛然として貧富貴賤壽命長短等の果を感じる事諸經に顕然たり、莊子の徒猶此理をよく弁せり、逍遙遊イマ云鶴鷄巢イマ林不イマ過イマ一イマ枝イマ偃鼠飲イマ河不イマ過イマ滿イマ腹イマ上イマといへり、其外朝野僉載に王無尋の麻車蒙求ニ載る鄧通銅山の古事とく得之知るへし、俗にいふ一升入壺ハ大海にても一升と此ことば金玉なり、然らば御身も此世に衣食住の分果阿れハこそ、此界の人となりて来れり、我も此世に衣食住のあるゆゑに

此世の人と生れ来るなり、然して世に生れたる中ニハ人に過たる貴きものハなし、五常を守り君臣父子兄弟の親疎をしり、善悪因果を分つ知恵備へたり、此故に心の人体を得たるを宝の山ニ入とハいうへし、受かたき人身を請て、又三途に帰るハ宝の山に入なから年を空しくして歸るにあらすや、只何事も我他彼此の思ひをやめて、其おのれくの道を津まやかに守らんにハ志かし、一犬形に吼れハ千犬声になき、一人虚を傳へて万人実を語るハ

皆浮世と名の付たる、志るしと思ひたまふへきにこそ、彼史記といふ書を見ルに良医ハよく病を治さる故に財を得、又植木ヤハ無病の直成木にまかれる病を付て財を得るをいへり、誠に脇目もふらず其己との術慎より外ハあらし、是則千変万化の理に通するの初門なるへし、彼子守童の鼻歌にもへ心こまかに小間物うれは、佐渡の金山爰にあるといへり、此歌を唄ふ子守童ハ口に唱ふのミにて此理にハうとし、よそにて聞居る大人ハ六十余州の貴賤裏借ヤの老婆の米櫃迄に佐渡の金山の弥倫してある事を知るハ理に通たるの徳なり、仏法の源理口にいふはかりにてハしる事あたはず、志らずして是を難するハ柱を守るの漢なり、閻天の飛礫なんその中せん末法理にう

とき人ハ因果変化の理にくらやミなるゆゑに諍ふて益なし、彼水中より出たる火ハ何としても消す事あたはさる

かことし、只因縁熟して時の至るを待にありといひ、かくいふも落る所ハ朝三暮四の戲論なりてのミ、ああ

南無阿弥陀仏く
罪科の薪なからに

古里もすて

かきあつめおく

法のこと葉

（四）宝曆三年十一月六日 本山召状写

宝曆三酉十一月六日召状之写

法傳寺

末寺 惠光院
本光寺

一念寺

西蓮寺

外ニ末寺

三ヶ寺

法傳寺且那

惣代三人

右明七日四時登山可有之候 已上

十一月六日

下鳥羽

法傳寺

同七日四時登山候へ御書付被仰渡写

惣本山

役者

御本山

御役者中様

(五)宝曆三年十一月八日 法傳寺旦那惣代本山

役者へ差出願書写

同八日本山差出候願書之写

乍恐奉願口上書

乍恐奉願口上書

去ル七日法傳寺被為召出追院被為仰付候儀、旦那共不承知申上候儀者、法傳寺儀達御聞候通貧寺殊ニ建立寺ニ不相応之高借銀御座候而相統難成候処、触菅建立之志深く御座候故、漸々ニ相統傳り相勤居被申候処、追院被仰付候而へ、建立ハ不及申上当時寺相立難申候、殊ニ右借銀暫時も小旦那江引受仕方無御座候間、此上何卒是迄之通触菅住職被致候様ニ御免之儀偏ニ奉願候 已上

一昨七日御本山ハ法傳寺并末寺旦那江呼出、住持触菅追院被申付ニ付、御朱印什物等相改旦那并末寺へ預り候様ニ被申渡し候へ共、不承知之段申達候、其訊去年ハ御吟味筋一々御本所様へ御届申上候ニ付、此度御申渡之趣御本所様へ申上、御返答可申上旨申達罷歸り候訳者、右法傳寺儀去ル申年流失已後大借、其去年ハ御本山御吟味ニ付借銀大分相増最早取統兼候処へ触菅追院被申付候へハ、銀子方得心不仕右借銀旦那共引受ニ被成候初而者、一向致方無御座難涉仕候、此上何分御本所様御勘弁被成下候様奉願上候 已上

西十一月八日

下鳥羽法傳寺旦那

惣代 大沢九郎右衛門

大沢庄兵衛

西十一月八日

法傳寺旦那惣代

小笹又三郎

大沢因郎兵衛

御代官様

不退上人木魚念仏出入一件史料

湯口主水様

(七)宝曆三年十一月十日 西公事方より法傳寺
同末寺召出状並に法傳寺末寺旦那より本所
宛出頭の届出

(八)宝曆三年十一月十一日 法傳寺旦那惣代本
山役者へ西役所出頭の届出

下鳥羽村

御本山へ左之通届候事

法傳寺

右末寺共

今日四時西御役所江法傳寺并末寺御召ニ付罷出候間、右
之段御届申上候 已上

右末寺之者共致同道明十一日四ツ時可罷出事

十一月十日

西公事方

十一月十一日

法傳寺旦那惣代

右之通被仰渡候間銘々印形御持参被成明十一日四時無間
違様ニ御出可被成候、但し西御役所江御出可被成候

星野九郎兵衛
小笹重右衛門

已上

御本山

十一月十日

御役者中様

右之通從西御役所御召ニ付御本所御届候事、前段差紙略
ス
右之通只今申来候間為御窺申上候

(九)宝曆三年十一月十七日 西公事方松村三吾

より法傳寺末寺御召状

本光寺

西蓮寺

十一月十七日晝四半時御召状

下鳥羽村

六郎兵衛
次郎左衛門

惠光院 本光寺

喜多右膳様

西蓮寺 一念寺

恋塚寺 法泉寺
天然寺

法傳寺
御役者中

右明十八日朝六時前西御役所へ御召被成候間、銘々印判
御持右刻限無遲滞被罷出候様御申渡可被成候 已上

酉十一月十七日

松村三吾

下鳥羽村

法傳寺

御役者中様

金宗寺 什物

上中下三卷之内

十二月十七日九時御召状左之通

下鳥羽村

恵光寺
本光寺
西蓮寺
一念寺
恋塚寺
法泉寺
天然寺

右明十八日四時前西御役所江御召被成候間、銘々印形御
持右刻限無遲滞被罷出候様、無間違可被申渡候 已上

酉十二月十七日

松村三吾

下鳥羽村

不退上人木魚念仏出入一件史料

